
Gimmick Game

ken

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gimmick Game

【Nコード】

N2659X

【作者名】

ken

【あらすじ】

人間の知識では理解不可能の異能の力「ギミック」。偶然にもその力を持ってしまった高校二年生の少年、天突鍵は、得体の知れない異能力者「ギミックカー」のバトル・ロワイヤルに巻き込まれる事になる。相手のギミックをコピーするギミック「能力模写」と、「生きたい」という強い信念を武器に、鍵はこの死亡遊戯デス・ゲームを生き残る事が出来るのか。

プロローグ 〓 50年前〓 (前書き)

どうも、kenと申します。初投稿で拙い部分も多いですが、精一杯執筆していこうと思しますので、よろしくお願いします。

プロローグ Ⅱ 50年前Ⅱ

「ハア……ハア……」

息が自然と荒くなる。

『彼』の視界の右半分は、もう使い物にならなくなっている。さっきまで感じていた、脳が直接バッドで打たれた様な鋭い痛みも、今は感じない。

とうとう感覚神経までイカれてしまったようだった。

だが、そんな事は今の『彼』にはどうでも良い。

今の『彼』にとって大切な事、やるべき事。それは、目の前にいる

『男』を倒す事だ。

『男』は、ごうごうと燃える火の海の真ん中で、『彼』と対峙する様に瓦礫の上に君臨していた。

頭から流れ出た液体が、白いシャツを紅く染めていく。

その上半身には、本来あるべき右側のそれが無くない。

それでも、彼は平然と『彼』を見据えていた。

見る物をゾツとさせる様な気味の悪い笑みを浮かべて。

「なあ……どうだ？ この俺をここまで追い詰めた気分は？」

いつもの、何処か人を小ばかにした様な態度で、『男』は言う。

『彼』は何の言葉も返さず、ただ『男』を睨み付けた。

もう何も言う事がない、とでも言う様に。

『男』はそれを見て、まるで遊び相手が見つかった子供の様に笑う。

「楽しいもんだろ？ 追い詰め、追い詰められ……そして相手を殺

す瞬間ってのは」

「ぶ、ざけんなよ……テメエ……」

『彼』は、今にも爆発しそうな怒りを必死に押えつけながら言う。

「人を殺して愉しいだと？ テメエの腐った価値観を俺に押し付けんじゃねえよ！」

『彼』は『男』を見据え、咆哮する。

だが、『男』にその咆哮は届かない。
ケタケタと笑いながら、『男』は黒く濁った天を仰ぐ。

「テメエが何をほざこうが、所詮俺達はただの玩具だ……殺しあう為に生まれ、殺しあう為に生きる」
「違う！」

『彼』は、『男』の言葉を真つ向から否定する。

「『殺す』為に生まれたんじゃない……仲間と共に生きる』為に産まれたんだ」

「仲間あ？ ハン、おめでてえ頭だ。最後に信じられるのは……自分だけだ。仲間なんざ、足枷に過ぎん」

『男』は、『彼』を見下す。

そして、生き残った左掌を『彼』に突きつけ、笑った。

「テメエの考えがどれほど甘く、どれほど醜いか……この俺が教えてやる」

「だったら俺は、その教えを真つ向から否定する」

『彼』もまた、口から染み出る赤を拭い、右腕を強く握り締めた。
しばしの、沈黙。

ごうごうと燃える炎が、彼らを逃がさんとするかの様に燃え盛った時。

タン と。

どちらからとも無く、二人は駆けた。

己が打ち倒すべき、標的をめがけて。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！」「」

雄叫びが交わされ、二人の拳は振りかざされ、そして

爆発した。

STAGE 1 - 1 Ⅱ 開戦前 Ⅱ

平和。

今の日本の状況を、これほどまでに端的且つ的確に表している言葉は無いだろう。

太陽は役目を終えて地平線へと消えていき、それが合図であるように、人々は家族のいる我が家へと帰っていく。学校だって同じだ。生徒達は学校という呪縛から逃れる様に、黄昏の街へと消えていく。彼、天突鍵あまつぎさきが教室の窓から見たのは、そんな他愛も無い日常だった。

「平和だなあ……」

誰に言うでもなく、鍵は呟く。

その時、ガラツと音を立て、教室の扉が開かれた。鍵が反射的にそちらに目を向ければ、一人の少女と目があった。艶のある黒髪を惜しげもなく伸ばし、同色の瞳で彼を見据える赤淵眼鏡の少女。いかにも優等生といった風貌だ。

「あら、まだいたのね。天突君」

どこか高圧的な印象を受ける彼女の名は、鍵画やりがあんこ餡子。見た目通り、鍵のクラスの委員長を務めている。

「ああ、委員長か。ちよつと平和に身を委ねてた」

「何言ってるのよ。もう帰宅時間だから帰りなさい」

「委員長だって帰ってねえじゃん」

「仕事よ、仕事。と言っても今終わったから、もう帰るけどね」

餡子の言葉に、鍵は興味なさそうに「ふうん」とだけ呟いた。そしてまた、窓の外へと視線を戻す。

「何を見てるの？」

いつの間にか鍵の隣にまで来ていた餡子が、彼と視線を同じくしながら言う。

そこにあるのは、生徒達が校門を抜け、街へと消えていくいつもの光景。その誰もが、輝かんばかりの笑顔を浮かべている。

「んー？ ……別に」

素っ気なく答え、鍵は重たい腰を上げ、机の上の鞆を手を取った。

「……………帰る」

最低限の言葉でそう告げ、鍵はスタスタと出口へ歩いていく。

「あっ、待ちなさいよー！」

慌てた様子でそう言い、餡子は駆け足で鍵の後を追っていった。

二人が校門の外に出たとき、日はすっかり隠れてしまっていた。先ほどまで溢れていた生徒達も、もういない。

「すっかり遅くなっちゃったわね」

「そうだな……こんなになるまで、俺あそこにいたんだな」

鍵が呟くと、餡子は訝しそうに目を細めた。

「自分がどれほどあそこにいたか、覚えてないの？」

「ああ。何か結構いたような気はするけど」

「はあ……ほんとアナタって変人よね」

呆れているのか感心しているのか、餡子は溜息を吐いた。

だが、鍵は意にも介さず夜空を見上げる。

「ほんつと……平和すぎて時間経つのも忘れてたよ」

どこか寂しそうなその声に、餡子は思わず彼の顔を見上げた。

その横顔はとても儂く、そして 綺麗なものだった。

いつもは見る事が出来ない彼の表情に、餡子は思わず頬を紅潮させる。

しかも不運な事に、それを鍵に見られてしまった。

「？ どうしたんだ？ 委員長」

「ふえ！？ な、何がよ」

「顔、赤いぜ？」

「な、何でも無いわよ！ また明日！」

はき捨てる様にそう言うと、餡子は逃げる様にその場を後にした。その様子を、鍵は終始不思議そうな表情で見つめていた。

「何だあ？ あれ」

訳が分からない、とでも言うように眩き、鍵は帰るべき家へと足を向けた。と言っても、彼は今親元を離れ、ここから徒歩10分ほどの場所にあるマンションで一人暮らしをしている。決して豪華では無いものの、学生の一人暮らしには申し分ない設備だ。

「あーあ……平和だ」

あと5分ほどで着こうかと言う頃、鍵は口癖の様に言ってきた言葉を呟く。周囲の家には明かりが灯り、端々から笑い声や、話し声が聞こえて来る。

まさに、平和の二文字が良く似合う。

だが、こんな平和の中においても、鍵の表情は曇っていた。

彼は、「平和」は大好きだ。これ以上に素晴らしいものはないと断言できるほどに。「普通」ともとれるようなこの空間が何よりも好きだった。

だけど。

しかし。

「平和だけど……退屈だ」

彼は、退屈が一番嫌いだった。常に心を躍らせてくれるような、そんな楽しく、エキサイティングな出来事があれば、と常に考えてきた。

「平和」は好きだが「退屈」は嫌い。

そして、「平和」ほど「退屈」なものもまた、ない。

その矛盾した想いが、鍵の心に重たくのしかかる。

「はあ……ちくしょう」

鍵は夜空に向け、悪態をつく。それがとてつもなく空しく、悲しい。

その時、どこからか機械音が響いた。

出所は、彼が右肩から下げている鞆。その中にある、携帯電話からだ。

鍵はその場に立ち止まって鞆をあさり、携帯電話を取り出す。ディスプレイを見ると、見た事もないメールアドレスが長々と綴られている。

若干訝しがりつつも、鍵は警戒するようにメールを開いた。

直後、彼の目が見開かれる。

「……………ギミック・ゲーム？」

真つ先に視界に飛び込んできた言葉を、鍵は思わず音読する。

その後、鍵はのめり込むようにディスプレイに釘付けになった。

そしてそこに綴られている文章を、音読していく。

「『おめでとうございます。アナタはギミック・ゲームの参加者と認定されました。人は誰しも、何かしらの才能を秘めていると言われています。アナタはその中でも希少な、ギミックを操る才能を持つ者』ギミックカー』として選ばれたのです。詳しい話は、後ほどアナタの元へ訪れる《扇動者》インスツルメントよりお聞き下さい。アナタのご検討、心よりお祈りしております』」

全て読み終えた後、鍵はメールを閉じ、溜息を吐いた。

「馬鹿馬鹿しい」

直後に出た感想が、これだった。いや、彼だけではない。このメー
ールを10人が受け取ったなら、10人全員が彼と同じ反応をする
だろう。

「最近のチェーン・メールってのは、全く突拍子もない事になっ
てるな。こんな話、普通信じないだろ」

呆れた様にそう言うと、鍵は携帯を制服のポケットに押し込む。
そして再び、黒が支配する街を歩き始めた。

先述した通り、彼は現在一人暮らしをしている。

特に不便はあるわけではない。むしろ満足すらしている。

だが、やはり帰ったときに部屋の電気が付いていないのは、何処
か寂しいものがあった。

今日もまたいつも通り、そんな寂しい部屋へと帰っていく……答
だった。

「どづいつ、事だ？」

顔を強張らせ、鍵は呟く。

マンションの四階、彼の部屋の窓から明かりが漏れている。

もし親や友達が遊びに来る場合、自身の携帯に連絡が来る筈だ。

つまり、今あそこにいるのは、自分の知らない人物、という事になる。

鍵は悪寒に駆られ、足早に部屋へと駆けていった。ガンガンと大きな音を立てて、四階へと上がっていく。ゆっくりと彼の部屋の前に立つと、耳を済ませる。

物音は、ない。

何かを物色している様子はない様だ。

警戒を解かずに、鍵はゆっくりとドアノブを回し、そのまま一気に扉を開いた！

「お帰りなさいませ、天突鍵様」

直後、鍵の強い警戒心とわずかな恐怖心は音を立てて崩れ落ちた。同時に、今度は呆れと不思議感が、彼の感情を刺激する。部屋の明かりが、暗闇に慣れていた彼の目を弱く貫いた。

「……………誰？ アンタ」

長らく続いた沈黙の末に、ようやく鍵の口から出たのはコレだった。

おそらく最も端的で、最も疑問に思っただ点だろう。

扉を開いた彼を出迎えたのは、いつもと変わら彼の部屋と、見た事のない美女だったのだ。

頭を上げた直後にさらさらと揺れる綺麗な黄金色の髪に、瞳にはエメラルドグリーンの真珠が二つ光っている。

白く細い手と対照的な黒いゴスロリ調の服装をしており、足にはニーソックスを着用していた。

秋葉原辺りのメイドカフェでも働いていそうなその女性は、その無表情な顔色を全く変えず、鍵の問いに答えた。

「私は、『須藤^{すどうあや}絢』と申します。先ほどメールを送らせていただいた、「ギミック・ゲーム運営委員会」の者です」

鍵は目を見開き、須藤と名乗る女性を見据える。

彼女は言った。「自分はギミック・ゲーム運営委員会の者だ」とほんの数分前に届いたメールを、頭の中で再読する。

彼女の言葉と、先ほどのメールとの共通項、「ギミック・ゲーム」。

ここまで手の込んだ悪戯をするとは、到底思えない。

それに、他人の部屋に無断で上がりこむ事は、悪戯というレベルでなくれつきとした犯罪だ。

もっとも、須藤はそんな事を意に介してもいないらしい。

まるで、「これから始まる事に比べれば、造作もない事だ」とでも言っているように。

「アンタ、どうやって入った？」

「玄関からですが？」

「鍵は掛けてあったはずだ」

「私に対して、鍵など無意味です」

須藤は断言してみせる。

「私は、『鍵開けのギミック』を持つギミックカーですから」

再び、鍵の目が見開かれる。

《ギミック》という言葉と《ギミックカー》という言葉も、彼には

聞き覚えがあった。

彼女もまた、《ギミックカー》と呼ばれる者の一人なのだ。

「その《ギミック・ゲーム》ってのは何なんだ？ 何故俺が選ばれた？」

「せっかちな方ですね。一度に聞かれても困ります」

顔色一つ変えず、須藤は言っただけ。

「詳しいお話は後ほど。早く外出の準備を行って下さい。これから3日間、ここには戻れませんので」

「3日間？ どういう事だ」

知らん顔で自分の横を通り過ぎようとする須藤を呼びとめ、鍵は問う。

須藤はその整った顔立ちを彼に向け、答える。

「これからアナタを、ギミック・ゲームが行われる会場へのご案内します」

鍵の部屋を後にした二人は、マンションの前に止まっていた黒いリムジンに乗車する。

先ほど走る事に無我夢中だった鍵はその存在に気付かなかったが、このマンションとこのリムジンは、明らかにミスマッチなものだった。

例えるならば、昭和の住宅地のど真ん中に高層ビルが建っている

様な感覚だろうか。

二人を乗せたりリズムジンは、ぶうんと息を吐き、東京の街へと繰り出していった。

運転席とは敷居で隔離されており、運転手の顔は見えない。

「ではまず、ギミックについて説明させていただきます」

鍵と対峙し、運転席に背を向ける様にして座っている須藤が言う。

「ギミックとは、言ってしまうえば『人間の知識では説明出来ない力の事です。私の場合、どんな鍵も一瞬で破ってしまう』《鍵開けのギミック》を保持しています」

「つまり超能力って事か？」

「そうですね。大きく分類すれば、その解釈でも構いません」

妙に堅苦しい言い方をする須藤に、鍵は少し眉をひそめる。

「それで、俺にもそのギミックとやらが宿ってるってわけか」

「ええ、そうです。もし、それが人類にとって脅威ではないと判断されれば、私の様に運営委員会に勤めたり、中には今まで通り平穏な暮らしをする者もいます」

「……つまり」

小さく、鍵は呟く。

「人類にとって脅威と判断された者が、ギミック・ゲームの参加者となる」

「そう言う事です」

顔色を変えず肯定する須藤と対照的に、鍵は険しい表情を浮かべ

る。

「そのゲームってのは……一体何なんだ？」

鍵の問いに、須藤は即座に答える。

「デスゲーム《死亡遊戯》です」

リムジンが夜の街を走る音が、妙に大きく感じられる。目を見開き、目の前の相手を凝視する鍵とは対照的に、須藤は顔色一つ変えていない。

まるで「その反応には慣れてる」とでも言うように。

「それって……殺し合い、って事か？」

「はい、そうです」

恐る恐る問う鍵に、須藤は間髪入れずに告げた。現実を否定する事をも許さないような速さで。

「ギミックを所有する者を、俗に《ギミックカー》と呼びます。そしてギミック・ゲーム参加者であるギミックカーには、それぞれ専属のインスタント扇動者が付きます」

ふと、先ほどのメールの文面が思い出される。

そこには確かに「詳しい話は、後ほどアナタの元へ訪れる扇動者よりお聞き下さい」とあった。

「つまり、アンタが俺専属の扇動者って事か」

「そうです。主にアナタをこうしてゲーム会場へと案内したりする事が任務です」

「じゃあ、俺が死んだらどうなるんだ？」

「そうですね……次のゲームから、また新たなギミックカーの扇動者となるでしょう」

鍵の表情が、変わる。

「次のゲーム……？」

「はい。ギミック・ゲームとは、初めてギミックカーの存在が発見された100年前から続けられてきたゲームです。もしこのゲームでアナタが死亡すれば、次回までに新しく発見されたギミックカーにメールを送り、ギミック・ゲームに参加して頂きます。同時に、私もその新しいギミックカーの専属扇動者となります。」

「要するに、俺達は使い捨て商品も同然って事か」

嘲るような調子で、鍵は吐き捨てる。この戦いに、アイデンティティなんてものはない。自分達は運営委員会という組織にとって、ただの玩具なのだ。

須藤はそんな彼を、しばし黙って見つめていた。

「……もうすぐ会場に着きます」

ほぼ同時に、リムジンがゆっくりと速度を落とし、止まった。

鍵は自動で開いた扉から外へ出ると、目の前の光景に目を見開いた。

「……何だ？」

そこは、いわゆるビル街だった。高層ビルが立ち並び、住宅は一

つも無い。東京では差しして珍しくもない、都会的な光景である。だが鍵は、一つ大きな違和感を感じていた。

明かりが、一つも灯っていない。

現在、午後7時前。

仕事を終えるには、あまりにも早すぎる時間帯だ。

それだけではなく、普通は深夜までやっていそうな店の明かりも消えている。

須藤はゆっくりとリムジンから降り、鍵を見据えた。

「ここは、ギミック・ゲームを行うために造られた街、《ギミック・タウン》です」

鍵は、驚きを隠せない表情で須藤を見る。

「ゲームのためだけに……街を建てた？」

「ええ、そうです。元々東京都の土地の1/4は、私達ギミック・ゲーム運営委員会の所有地です」

信じられない話だ。どこの小説やドラマじゃあるまいし、そんな広大な土地を所有出来る組織など、ある筈がない。

だが、今の鍵には、そんな突拍子もない事もすんなり信じる事が出来た。

仮に今までの話が本当だとすれば、そんな組織が一つあっても不思議ではない。

元から受容力の高い鍵にとっては、その程度の認識だった。

「では、これより三分後、午後七時よりギミック・ゲームを開催致します」

「俺は何をしたら良いんだ？」

鍵の静かな問いに、須藤は少し目を細める。

「これから3日後の朝七時まで、他のギミックカー相手に生き延びれば勝利です。敗北は」

「《己の死》……か」

遮る様な鍵の言葉を、須藤はゆっくりと首肯する。

「では、3日後の7時にまたお会い出来る事を願っています」

「待て。一つ聞かせろ」

「……何でしょう？」

相変わらず顔色を変えない須藤に、鍵は問う。

「俺の中に宿る《ギミック》は……一体何なんだ？」

しばし黙った後、須藤はゆっくりと口を開く。

「

放たれた須藤の言葉に、鍵は目を細める。

「それでは……検討を祈ります」

須藤はリムジンに乗り込み、漆黒を纏ったそれはそのまま街の光の中へと消えていく。

一人残された鍵は、思わず吹き出した。
思い出されたのは、数時間前に館子から告げられた「また明日」という言葉だった。

「どうやら、そういうわけにもいかないみたいだな」

だったら、と言葉を繋げ、鍵は暗闇に浮かぶ街を睨みつけた。

「生き残ってやる……そしてまた、あの平和の中へ戻ってやる！」

彼の叫びに呼応するかのように、午後7時を告げるサイレンが鳴り響いた。

史上最悪の殺し合いが今、始まったのである。

STAGE 1・2 〓 9月29日〓 (前書き)

(ストーリーを一部修正致しましたので、ご了承下さい)

STAGE 1 - 2 「9月29日」

〔9月29日 PM:07:15「都内某所」〕

荒れ果てた廃ビルの階段を、須藤はカッン、カッン、と甲高い音を立てながら上っていく。

人ではない者が出てきそうな雰囲気を纏うその様は、まさに「幽霊ビル」というに申し分ないものだった。

静寂を裂く様に響いていた足音は、須藤が五階に差し掛かった所でなりを潜める。

暗闇に包まれたフロアに一つ、ほんのり明かりが漏れている扉があった。

壁に張り付く様にしているその扉のドアノブを回し、須藤は中へと入っていく。

そして、

ビルの外見に不相応な大量のコンピュータが彼女を出迎えた。

壁、天井、床まで四方黒に囲まれた部屋に、デスクトップが唯一の光を灯し、その端々からケーブルが蛇の如く伸びている。

一体どうやって電気が通っているのかは不思議だ。

中心には、喪服姿の中年男性が一人、片足を椅子に上げ、片足を下げた状態で座っていた。

二十代後半から三十代ほどに見えるその男性はドアの音に気付くとそちらに目をやり、そして須藤の姿を捉えると笑みを浮かべる。

男性の名は、なはいし・けんと檜橋剣斗。彼もまた、須藤と同じくギミック・ゲーム運営委員会に勤める者だ。首の根元付近まで伸び、酷い寝癖の付

いた髪と、鋭く切れた狐目を持つその風貌は、紳士的ながらも、常に人を騙さんと画策する妖狐のような雰囲気纏っている。

「おう、絢。お疲れさん」

「どうも」

素っ気なく答え、須藤は剣斗の斜め後ろに立つ。

そして、怪しく光る大量のディスプレイに目をやる。

そこに映っていたのは、ゲームが開始したばかりのギミック・タウンの様子だった。

「状況はどうですか？」

「まだな〜んも」

さもつまらなそうに言うと、剣斗は懐に抱えている袋からガサガサ……と音を立てて何かを取り出し、それを口内へと運んでいく。

暗くてよく見えないが、どうやら「柿の種」なる菓子だった。

しかも器用な事に、柿の種だけを選別して食べている。

机の上にも柿の種の袋がいくつか置いてあるが、そのどれもがピ―ナッツだけを残した状態だ。

「……相変わらず奇妙な食べ方をしていますね」

「ピーナッツは苦手なんだよ」

「だったら食べなければ良いではないですか」

「柿の種は好きなの」

「柿の種のみ入っている袋があるでしょう。あれではダメなのですか？」

「量がなあ〜……これが一番、一袋辺りの柿の種の量がちょうど良いんだよ」

あまりにも自分勝手な言い分に、須藤は思わずため息を吐く。そして、おもむろに剣斗の食べ残した袋を取ったかと思うと、それをポリポリと食べ始めた。

剣斗は思わず吹き出してしまふ。

「何ですか？」

怪訝そうな顔をする須藤を、剣斗は肩肘を付いて見つめる。

「いや、何かシニールだなと思って」

「コレではピーナッツが可哀想ですから」

「お前って妙な所で慈悲深いよな」

人間には冷酷と取れるほど冷静なくせに、と剣斗は心の中で悪態をつく。決して口には出せないが。

「それで、アイツはどうだ？」

「……天突鍵ですか？」

ピーナッツを食べる手を一旦止め、須藤はエメラルドグリーンの瞳を、画面と睨めっこしている剣斗に移す。

「ああ」

「そうですね……正直、分かりません」

須藤の手が、少し下がる。

「見た目は普通の青年風ですが……それにしても受容力が高く、理解能力にも長けています。それに……」

「それに？」

「何といたしますか……妙な気を感じました」

剣斗の視線が、須藤に向けられる。

「うまく言い表せないのですが、放っておけば脅威になってしまい兼ねないような……そんな気が」

俯く須藤を剣斗はしばし見つめていたが、やがてフツと笑い、再び視線を画面に戻した。

「脅威となる者の気、ねえ……それが何なのか、俺にはよく分かんねえけど」

剣斗は言葉を区切り、笑みを浮かべる。とても無邪気で、幼く、そして残忍な笑みを。

「今回のギミック・ゲームは……今までとは違う何かが起きるかもしれないねえな」

7月09日 PM 7:15 「ギミック・タウン第五区」

薄気味悪い風が、ギミック・タウンを駆け回る。

死の隣合わせの世界に踏み込んでしまった鍵を歓迎するようなその風に、鍵は背筋を凍らせた。

「『地獄の入口によっこそ』ってか？ 良い性格してんな」

言葉の端々から見受けられる恐怖に反して、鍵は笑みを浮かべていた。

風と会話をしている、とでも言うのだろうか。

しかし、当然返る言葉はなく、漆黒に包まれたビル街が彼を見下すだけだった。

「アイツ……《ギミック・タウン》は東京の1/4を占めてるとか言ってたな」

黙々と聳え立つビルを見上げ、鍵は呟く。

「それほどまでに、アイツ等の権力は絶大って事か」

誰に言うでもなく、鍵は吐き捨てる。

彼にはまだ分からない。運営委員会がどのようにギミックカーという存在を判別しているのか、どうしてギミックが生まれたのか、何故殺し合いをさせるのか、そして……自分が一体、何者なのか。

何も分からないまま、彼はこのゲームに参加させられたのだ。

それが不安の塊となって、鍵の心を押しつぶそうとする。

鍵は一度立ち止まり、すぐ右にあるビルの扉を覗き込む。

そこには、自分とそっくりな人物が、彼の事を見据えていた。

「俺は……」

その時、

「っ!？」

鍵は目を見開いた。

ギリりと、ガラスの向こうで何かが光ったのだ。まずい。

本能的にそう感じた鍵は、半ば反射的に体を横に転がす。

刹那、ドオン！という爆音が辺り一体に響き渡った。

少し砂埃が立ちこめ、鍵の目を弱く刺激する。

「……何だ？」

地面に転がった身体をゆっくりと起き上がらせ、鍵は先ほど自分が立っていた場所を見る。

先ほどまでであったドアが消え、変わりに地面が抉れ、ガラスの破片が散らばっていた。

「あーあ、かわしちゃったのか」

直後、落胆の声が鍵の耳を打つ。

おそらく少女であろうその高い声の出所は、彼の後ろ。

鍵は恐る恐る、身体を反転させる。

そこには、寝癖が付いた銀一色の長髪と藍色の瞳を携えた少女が、心底残念そうな顔をして立っていた。

年はおそらく中学生くらいだろうか。どこかの学校の制服を着ており、厚底ブーツを着用している。

「おっしいなあ、夜じゃなくて朝だったら当たってたのに」

確かにそうだ。

漆黒に一点の光が見えたため今はかわせたが、もし朝だったら光に気付かず、あのガラスの破片のようになっていたかも知れない。

鍵は、顔から徐々に血の気が引いていくのが分かった。

このままでは殺されると、本能が彼にそう告げる。

「お前……誰だ？」

慎重に問う鍵に、少女は一瞬呆れたように目を丸くする。かと思えば、途端に腹を抱えて笑い始めた。

「可笑しい事いうね、お兄さん。ここはギミック・タウンなんだよ？ ギミック以外に誰がいるっていうの？」

鍵は脈打つ心臓を必死で抑え付けながら、少女を見据える。少女はやがて笑いを止め、再び目の前の鍵を見た。

「さて、お兄さん。早速だけど、二つ選ばせてあげる。簡単なことだよ。戦うか、逃げるか。戦うんなら勿論お兄さんは殺させてもらうよ。まあ、どうせ逃げても追いかけて殺すけど」

「どっちにする俺を殺すんじゃないか」

「当然だよ。制圧者タイラントになるには、それしかないしね。それで、どうする？ 見た所お兄さんギミック・ゲームは初めてみたいだし、特別に選ばせてあげる」

制圧者、という単語の意味は分からなかったが、そんな事は今の鍵にとって重要な事ではない。

今の彼にとって重要な事。やるべき事。それは、彼自身がよく分かっていた。

「悪いけど……俺は他人おまえが決めた筋道通りに進む気はない」

鍵は、目の前の少女ギミックをしっかりと見据えた。

その瞳に、強い意志を宿して。

「俺はお前と戦って生き残る……それだけだ」

「へえ……てつきり命乞いでもしてくるかと思ってたけど。お兄さん、結構肝座ってるね」

気にいった、という様に少女は笑った。

そしておもむろに、右掌をすつと天に向けた。

その時、バチバチと何かが弾ける音が辺りに響く。見れば彼女の腕に、無数の光が纏わり付いていた。

それは、目の前の敵を排除するために少女が生み出した「雷」だった。

目を見開く鍵を、少女は輝かんばかりの笑顔で見つめる。

「さあ、ちゃんとボクを楽しませてね？ お兄さん」

鍵は思う。

「無邪気ほど残酷なものはない」と

「始めたみてえだぞ、お前んとこのアイツ」

右端一番下のモニターを見つめていた剣斗が呟く。

須藤もまた、そのモニターに視線を向けていた。

自分の担当するギミックカーの戦いが、やはり気になるようだった。

「相手は、如月来夏……ですか」
「ああ。第五区ではそこそこの名が知れたギミックだ。初戦の相手としては、ちときついが……お前の言う「脅威」が本当なら……あるいは、な」

剣斗は椅子の背にもたれかかり、笑みを浮かべた。

「さあ……楽しませてくれよ、天突鍵」

それは、期待と懇願を混ぜたような声だった。

「アハハッ！ ほらほらどうしたのお兄さん？ さっきから避けるばかりだよお！？」

「ごちゃごちゃとつるせえな……舌噛んでも知らんぞ」

悪態を吐きながらも、鍵は内心焦っていた。

先ほどから次々と飛ばされてくる雷の矢をかわすだけでも、もはや精一杯の状態だ。何の力も使わずかわせるだけでも、人間離れしている気もするが。

鍵は体勢を低くし、来夏の右手に宿る雷を見据えた。
速度に特化したそれは、鋭い光を放ちながら鍵を貫かんとする。
ちっ、と舌打ちをしつつ、鍵はそれを右に跳んでかわす。

「っ！」

途端に、鍵の左腕に鋭い痛みが走った。

かわし切れなかった雷の矢が、彼の左腕をかすったのだ。傷口を抑えつつ、鍵は立ち上がる。

(もう……かわすのも限界か)

だとすれば、やるべき事はたった一つ。

(かわせないなら……攻めるしかねえ)

突破口がない訳ではない。

彼は見抜いていた。雷の矢を放つ時、僅かではあるが隙が生じるのだ。

つまり、来夏の放った雷をかわした後、次の雷が放たれるまでの間を突けば

(倒せる……可能性はある)

先ほどから雷を交わし続けているため、鍵の眼は慣れて来ている。彼女が攻撃パターンを変えてしまえば、この作戦は使えない。事は急を要する、という事だ。

「やあっとやる気になってくれたみたいだね」

無邪気に笑いながら、来夏は右手を鍵へと突きつける。

(チャンスは一度……奴がもう一度雷を放ったとき)

「じくり、と唾をのむ音が、鍵の耳にのみ響いた。

「さあ、行くよー!」

来夏の右手から、雷の矢が 放たれた。
鍵は神経を研ぎ澄まし、体をひねってそれをかわす。

(今だ！)

右足に力を入れ、間合いを詰めんとする。
だが、

「なっ……」

鍵の目が、見開かれた。

直後、衝撃が彼の体を襲い、そのまま数十メートル先のビルの壁に叩き付けられた。

「かはっ」

空気が鍵の体から押し出される。

そんな彼を、来夏は無邪気で残酷な笑みを浮かべて見つめていた。

「雷の矢を放つ合間を狙うのは良い手だけど……ボクの方が、一枚上手だったみたいだね」

鍵は、先ほど来夏の一撃を喰らった腹を抑えつつ、ゆっくりと立ち上がる。

「ボクはお兄さんより年下だと思っけど、ギミックの扱い方はお兄さんより先輩なんだ」

ニヤリ、と怪しく笑い、来夏は足を前に突き出す。

「だから……こんな事だつて出来る」

すると、来夏の足からバチバチという音が鳴り響く。

その時、鍵はすべてを悟った。

要はギミックの力を応用するという事だ。

来夏は雷を足に纏わせ、その電力を利用し、正に「電光石火」で鍵の目の前に現れたのである。

「残念だつたね……お兄さん」

来夏はゆっくりと右腕を鍵に向ける。

「ばいばい」

来夏の右腕が一層強く光り、今まで以上の雷の矢が 放たれる。

鋭い光と弾ける様な音を纏ったそれは、鍵へと一直線に飛んでく。

耳を劈く爆音が、闇を支配した。

電力発電所の全電力がショートしたのでははないかと錯覚するよ
うな、とてつもない音だつた。

かまいたちの様な暴風と雷により、砂塵の竜巻が辺りに吹き荒れ
る。

そして爆音が収まり、砂埃が晴れた時、無残にも肉が四散した鍵
の姿が………なかった。

いや、肉どころか、姿そのものがなくなっている。

「ん？ 逃げちゃったのかなあ？」

首を傾げ、来夏は眩いた。

「はあ……はあ……」

荒い息を吐きながら、鍵は路地裏にいた。

寸での所で路地裏に飛び込み、事なきを得たのだ。

だが、受けた傷はあまりにも大きい。

右わき腹に、大きく血が滲んでしまっている。

鍵は左手で傷口を抑え、ゆっくりとその瞳を閉じた。

(考える……神経を研ぎ澄ませ)

閉じていた瞳を開き、鍵は大きく息を吐く。

(俺は生きるって決めたんだ……生きてまた、日常あそこに戻る)

その時、コン、という低く鈍い音が小さく響く。

鍵がそちらを見ると、彼の手元に、鉄パイプが一本落ちていた。

それを手にとり、しばし見つめる鍵。

(……そうか！)

鍵は目を見開き、口をキュッと結ぶ。

はつきり言って、一か八かの作戦だが……。

「やるしか……ねえか」

「お兄さあ〜ん……まあ〜だ隠れてるのお〜？」

さも退屈そうに、来夏は叫ぶ。

まるでかくれんぼの最後の一人が見つけれない子供のようだった。

「どうせ隠れてもさあ〜ボクとお兄さんの圧倒的経験差は埋められないよお〜？ 素直に出てこようよお〜」

「ああ……そうだな」

来夏の声に答える様に、鍵は呟いた。

だがそれは、来夏にもしつかりと届く声だった。

来夏は鍵の姿を見るなり、ニパアという効果音が付きそうな笑みを浮かべる。

「やあ〜つと出てきてくれたんだあ。って事は、諦めたのかな？」

「残念だが、そいつぁ違うぜ」

鍵はニヤリと笑う。そして、背中に回していた右腕と、そこに握

られてた物を構える。

それは、先ほど路地裏で見つけた鉄パイプだった。
それを見た途端、来夏は笑い出した。

「あつははははは！　なにそれ！？　そんな鉄おちちパイプやでボクの事
倒すつもり？」

「そつだ」

間髪入れず、鍵は答える。

余裕とも取れる笑みを浮かべて。

「おれはコイツで、お前を倒すつもりだよ」

「へえ、ボクもナメられたもんだなあ……」

来夏の顔から、笑みが消えた。

先ほどまでの子供じみた表情は消え、静かな怒りを灯している。

「だったらまた教えてあげるよ……格の違いつてヤツをね！」

来夏は右手を突き出し、今まで以上の密度を誇る雷の塊を鍵に放
った。

鍵は目を細めて鉄パイプを握り締め、体をひねり、雷をかわす。

そして次の瞬間、鍵は思いがけない行動にでる。

彼は走りながら、握り締めていた鉄パイプを来夏目掛けて放り投
げたのだ。

来夏は一瞬目を見開くが、やがてニタア、と笑ってみせる。

「なあゝるほど、鉄パイプを避雷針代わりにして雷を防ごうってわ
けね」

でも、と来夏は続け、飛んできた鉄パイプをしつかりと掴む。

「無駄だよ、すべての金属は雷の味方だから」

来夏は掴んだ鉄パイプを両手で構え、突進して来る鍵の方を真正面から見据える。その絶望に打ちひしがれた顔を見ようと。だがその瞬間、来夏の目は再び見開かれる。

鍵は　　笑っていた。

そして彼は、スツと右手を来夏へと向けた。
何かが来る。

直感的にそう感じた直後、来夏の体を衝撃が襲う。
そのまま来夏の体は、突風に吹かれた様に吹き飛んでいき、ビルの壁にクレーターを作った。

来夏はずると地面へ落ちていき、ポトリと力なく倒れた。

「かはっ……な……にが……」

激しい痛みが来夏の体内で爆発する。

地面に倒れたまま、来夏はその視線を懸命に鍵へと移動する。

鍵は左手で右わき腹を抑えながら、肩で息をしていた。

「残念だったな……お前の力は、俺のものでもある」
「え……？」

訳が分からない、と言った様子で、来夏が声を絞り出す。
鍵は痛みに顔を歪めつつも、苦笑してみせた。

「お前のギミックは、コピーさせてもらったからな」

これこそが彼、天突鍵の持つギミックだった。

触れた相手のギミックを自分のものとして使う事の出来る力、能力キミ模写である。
ツク・イミテーター

「雷の力は、そのまま磁力でもある……鉄パイプを投げれば、お前が受け止めるだろうって事も分かった」

そこで、来夏は気付く。

鍵に投げられた鉄パイプが、自分に張り付いている事に。

つまり、鍵の狙いは最初から鉄パイプを来夏に持たせる事だったのだ。

そして鉄パイプと自身の模写した雷による磁力を反発させ、彼女の体を数十メートル先まで吹き飛ばしたのである。

「……ボクも気付いていなかったギミックの力を、即興で模写しただけの相手に発揮されるなんてね」

来夏は自嘲する様に笑う。その中には、かすかに諦めの色も見えていた。

「それで……どう、するの?」

「ん?」

鍵が、少し不思議そうな顔をする。

「何がだ?」

「決まってるじゃん……ボクの事、殺さないの?」

鍵の目が、見開いていく。

しばし倒れた来夏を見つめた後、ふうとため息を一つ吐いた。そしてそのまま、くるりと身体を反転させる。

「……さつさと此処から離れて、大事にしてる。じゃねえと、狙われても勝ち目薄いぜ？」

そのまま、鍵の足はゆっくりと前に進められた。

「ちょ、待ってよ」

目を見開いた来夏が、少し身体を起こして叫ぶ。

傷が少し疼いたが、今はそんな事も気にならない。

鍵は足を止めるが、振り返る事はしなかった。

「何で……殺さない、の？」

来夏の問いに、鍵はしばし黙りこむ。そしてやがて、ハアと盛大にため息を吐いた。

「生憎だが、俺あ人殺しのために、このゲームを戦ってんじゃねえ」「えっ……じゃあ」

来夏が言葉を紡ぎ終える前に、彼女は自ら言葉を止めた。

鍵は顔を半分だけ来夏に向け、淡く微笑む。

「俺は生きる為に……俺の平和を取り戻すために戦ってたんだ」

そうとだけ告げ、鍵は再び闇の中を歩みだし、そして……消えた。

「生き抜く為に戦う、か……」

「ごろん、と仰向けになり、来夏は呟いた。こちらの激戦などお構いなしに、星はいつもの通り輝いている。

「ほんつと……妙な人だったな」

目を閉じて、来夏は微笑む。不思議な気持ちだった。負けたというのに、妙に清々しい。まるで負けたことに満足してる様だった。その時、コツン……コツンという足音が来夏の耳に届いた。

「……中々、面白い奴が現れたな」

その声に、来夏の様子は凍りついた。

だが、飴玉を口の中ですころころと転がす声の主は、顔色一つ変えない。

「だが、幾分甘い……哀れな敗者を生かしておくとは」

声の主はスツと右手を上げ、掌を来夏へと向けた。
途端に、気味悪い風が辺りを覆う……いや、違う。辺りじゃない。

来夏の身体を覆っているのだ。

「敗者には……それ相応の『代償』を受けてもらう」

刹那、鋭い音が響き渡る。

だが、それが鍵の耳に届くことは無かった。

STAGE 1 - 3 「9月29日〜9月30日」

〔9月29日 PM 11:45「都内某所」〕

「やるなあ天突の奴……まさか如月ですら知らずにいたギミックの特性を見抜いたあな」

「……………」

先ほどより少し明るくなった剣斗が言う。

表情も心なしが、満足気なものとなっていた。

そんな彼とは対称的に、須藤は若干顔を顰めている。

「どうした、絢？」

「……何を企んでいるのですか？」

柿の種を食べていた剣斗の手が、止まる。

「アナタがここまで一人のギミックに固執した事は、今までにありませんでした。それほどまでに天突鍵に注目しているのは……何か企みがあるのではありませんか？」

「さあ……どうだと思う？」

間髪入れずに答え、剣斗は挑戦的な瞳で須藤を捉える。

見るものに恐怖にも似た不気味な印象を与えるその笑みに、須藤は少したじろいだ。

「すぐに答えを求めるのは、人間の悪い癖だ……少しは自分の頭で考えな」

カタカタ……とキイが打たれる音が木霊する。

剣斗の眼前にあるモニターには、如月来夏のデータが表示された。

「それに、俺が何をしようとゲームは何も変わらない。戦って生き残るか……それとも死ぬか、だ」

言い終えるのと、剣斗の白く細い悪魔のような手が「Del」を押すのは、ほぼ同時だった。

区」

9月30日 AM 00:00「ギミック・タウン第五

ギミック・タウン第五区に唯一存在する病院施設5階に、現在鍵は身を置いている。自然と千鳥足になり、未だ出血を続ける右わき腹を抑えながら、ある部屋を目指していた。

そしてその部屋は、すぐに見つかった。

直後、刺激的な匂いが鍵の嗅覚を襲う。薬品の匂いだ。鍵はこの匂いが、あまり好きではなかった。

だが、今はそんな事を言っている場合ではない。出血を始めてから、大分時間が経っている。早く処置をしなければ、このままお陀仏だ。

鍵は薬品棚から消毒液、その隣の棚からガーゼと包帯を取り出し、月明かりに照らされた漆黒の治療室に一つだけ置かれている白いベツドに腰掛けた。

おもむろに上半身をさらけ出し、負傷箇所である右わき腹と右腕に、消毒液を乱暴にかけて行く。

「っ！」

痛みに顔を歪めながら、鍵は必死に意識を保ち、治療をしていく。本当は傷口を縫いたいくらいだが、素人である自分がそんな事をしても成功率は低く、第一今は麻酔もない。そんな状況で傷口を縫い付けるのは、明らかに危険だろう。

鍵は消毒を終えると、瓶を傍らに置き、ガーゼを傷口に当て、包帯で巻いていく。本当はもっと的確な治療法があるのかもしれないが、医学的な知識に乏しい彼に出来る事は、これくらいしかなかったのだ。

「病院があつたのは、救いだつたな……」

包帯を巻き終え、服を身に着けつつ、鍵は呟く。

「ギミックの数が分からない限り、油断は出来ないが……今の怪我じゃ、出歩いても殺されるだけだ。しばらく此処で休んだ方が良いか」

鍵はごろり、とベッドに転がり、身をゆだねた。

「しかし……アイツが言っていた制圧者タイラントってのは一体？」

アイツ、とは先ほど戦った雷のギミックを使う少女「如月来夏」だ。

最も、彼自身は彼女の名を知らないが。

「制圧者……アイツはそのために戦っていたみてえだからな……。何かギミック・ゲームの上で重要になるものなのか……」

頭蓋骨の中を跳ねまわる疑問を解こうと試みるが、ギミック・ゲームに関する知識自体が少ない今の彼に、その疑問が解けるはずも無かった。

「とにかく今は、戦って生き残るしかないって事か……」

そう結論づけ、鍵はしばしの休息を最大限に活用するため、少しでも疲れを取ろうと目を閉じた。

その時、

カッン。

「っ!？」

鍵は反射的に起き上がる。だが、辺りは何も無かった様にシンと静まりかえっている。

だが、鍵の耳には、かすかではあるが確かに人の足音が聞こえていた。

「まさか……新手か？」

悪寒が、鍵の身体を駆け回り、心臓は激しく脈打つ。

今の状況で他のギミックカーと遭遇しても、勝率は限りなく低い。現在彼がコピーしている雷のギミックと相性が良ければ幾分戦いやすいが、それでもこの重傷は大きなハンデとなるだろう。

だがしかし、このまま此処にいても、見つかって殺されるのがオチだろう。

鍵は覚悟を決めた。

ゆっくりとベッドから離れ、壁に耳を貼り付ける。

するとまた、カツン　　という音が聞こえてきた。
間違いない、と鍵は確信する。

誰かが、こちらに向かって来ている。

鍵は、瞬時に思考を働かせる。

人らしきものの足音は、かなり遅く、か弱いものだ。
此処からは、まだかなり距離がある。

このまま待つべきか、それとも一気に仕掛けるべきか。
思考を働かせる鍵。その時、

ボタン、と力ない音が、外から響いた。

同時に、先ほどまで響いていた足音がピタリと止まった。

おかしい。

そう思い、鍵は覚悟を決め、勢いよく扉を開いた。

「!?!」

直後、彼の目が見開かれる。

原因は、廊下に倒れている黒く大きな塊。

月明かりに照らされた廊下に倒れるそれを見て、鍵は目を見開いた。

それは、廊下に血溜りを作って倒れている「人間」だった。

「おい！」

鍵はわき腹を襲う痛みにも目もくれずに走り寄り、人間の前にかがみ込んだ。

見ればそれは、自身と同年代くらいであろう少女だった。

少し暗いオレンジ色の長髪も、おそらく高校であろう制服も、その上から羽織っている黒いコートも、今は、所々彼女自身の血で黒く染まっている。

廊下に出来た大きな血溜りと、彼女の身体の至る部位に見受けられる傷がそれを物語っていた。頭からも血が噴出しておし、彼女の整った白い顔に紅い川を形成している。

早く手当てをしないと、手遅れになってしまう。

「おい！　しつかりしろ！」

少女から反応は、ない。

完全に気を失っている様だった。

「……………仕方ねえか」

鍵はわき腹の痛みに苦しみながらも、少女を肩に担いで立ち上がり、再び治療室を目指した。

同刻。鍵が少女を拾った病院から少し離れた場所に、『彼』はいた。

二時の方向に広がる漆黒を見つめ、佇んでいる。

足元には、黒ずんだ赤と、その発生源である「塊」が落ちていた。途端に、『彼』は歯をむき出しにして笑う。

とても残酷で、狂気的な笑みだった。

尖った八重歯が、より一層『彼』の雰囲気を引き立てている。

「一人逃がした力……まあ、いいだろう」

『彼』は目の前に落ちている「塊」を、邪魔だと言わんばかりに蹴りとばす。

うつ伏せに倒れていた「塊」は仰向けに、大の字になる様に転がった。

「また会ったラ……その時殺せばいい」

〽9月30日 AM 11:00〽ギミック・タウン第

五区」

「ん……」

小さなうめき声を上げながら、少女は目を覚ました。

ぼんやりとした視界に最初に飛び込んで来たのは、真っ白に染まった天井。

そして、薬品の鼻に付く匂いが彼女を刺激する。

しばし怠惰に身を任せていた時、

「よう、起きたか？」

突如として彼女の耳を打った男性の声。

反射的に、少女は飛び起きた。

「痛っ！」

襲い掛かってくる激痛に顔を歪める少女。

「無理しない方がいいぜ。かなりの重傷だったんだ」

再び聞こえる、男性の声。

痛みが若干引き、少女は声の主を見据えた。

そこには、どこかの学校（外見からして、おそらく高校だろう）の夏服を着た黒髪の少年、天突鍵だった。

少女の眠るベッドの隣にある椅子の背もたれに腕を置き、少女を見つめている。

「アンタ、半日近く眠ってたんだぜ？ それまでに他のギミックの襲撃を受けなかったのは、ラッキー以外の何者でもないな」

「……………」

少女は、警戒した様に鍵を睨み付ける。

「そんな警戒すんなよ、俺あお前と戦うつもりもねえし。第一お互いこの怪我じゃ戦えねえだろ？」

言われて初めて、少女は自分の身体の至る所に巻かれた包帯に気付いた。

頭、腕、太腿、腹、そして……。

「あ……………」

突如として、少女は熟れた林檎の如く顔を真っ赤にしてうろたえた。

あまりに急な変貌に、鍵は首を傾げる。

「いきなりどうした？」

「どうしたじゃない！」

今度は、鍵を睨み付けたまま叫び声を上げた。

「アナタ……見た、でしょ！」

「はぁ？」

見た？ 一体何を？ そして何故少女は顔を真っ赤にして怒っている？

様々な疑問が交錯する中、鍵は少女が両腕で胸を隠す様に覆っている事に気付いた。

「胸の傷が痛むのか？」

「そうじゃない！」

再び怒鳴り散らす少女。

「胸！ 私の胸見たでしょ！」

啞然、とは正にこの事である。

つまり彼女は、胸を見られた事が嫌だったらしい。

鍵は、盛大にため息を吐いた。

「お前なあ……そんな事言ってる場合か？ もしそのまま放っておいたら、お前出血死してたかもしれねえんだぞ？」

「でも、私……」

急に黙り込み、俯く少女。

「今度は何だ？」

ため息交じりに、鍵は言う。

「その……えと……」

もごもごと、何やらハツキリしない少女の態度に、鍵はイラついた様に頭をかいた。

「言いたくねえんなら無理すんな。まあ取りあえずは、無事で何よりって事で良いんじゃないの？」

「うう……ま、まあ手当てしてくれた事には礼を言うわ」

(何か偉そうだなコイツ……)

若干頭にきた鍵だったが、争いは無駄と判断し、こらえる。

「ところでアンタ、何であんな血塗れだったんだ？」

鍵に言われ、少女はハツとした様に見開いた。

直後、少女は飛び起きるようにベッドから離れる。

直後、収まりかけていた痛みが、再び彼女の身体で爆発した。

顔をしかめてよろめいた少女を、鍵は慌てて支えた。

「おい、無理すんな」

「離してよ！ アイツだけは……アイツだけは許さないんだから！」

「いいから落ち着けて」

「離せつていつてるでしょ！ アナタには関係ないじゃない！」
「落ち着けて言ってるんだろ！！！」

鍵の叱咤され、少女は動きを止める。

鍵は少女の両肩をしっかりと掴み、至近距離でその整った顔を見つめた。

「確かに、俺には関係ない事かもしれねえ。でもな、生憎俺は、目の前で人が泣いてんのに知らん顔出来る様な人間じゃねえんだよ！」

鍵の言葉に、少女は目を見開いた。

「一人で抱え込んでないで、良いから俺に話してみろ！ 他人に甘える事も、一つの勇気だろ？」

彼女は空色の瞳から、ぼろぼろと透明な雫を零した。
突然の事に目を見開く鍵の胸に、少女は顔をうずめる。

「う……ひつく……」

「……安心しろ」

鍵は目を少し細め、少女の頭に手を回す。

「何があったか知らんが、もう大丈夫だから。な？」

その後、少女が泣き止むまで、鍵は彼女に胸を貸していた。

「私は、御包李兔^{みつみ・りゅう}。この戦いには、去年から参加してる」

「へえ、じゃあ俺より先輩なんだな」

「え？」

「俺は今回が初めてなんだ。名前は、天突鍵」

それで、と鍵は続ける。

「一体何があつたんだ？ 何であんな血塗れだった？」

「……………制圧者よ」

制圧者。

その単語に、鍵は目を見開いた。

「その制圧者ってのは……………一体何なんだ？」

「ああ、アナタは今回が初参加って言ってたわね」

少し笑い、李兔は呟く。

「このギミック・タウンは、第一区から第十区までに分かれているの。そしてそれぞれの地区で最も多くのギミックカーを殺し、地区最強の称号を得た者を『制圧者』と呼ぶの」
「要するに、最強の人殺しってわけか」

吐き捨てる様に、鍵は言う。

「それでアンタ、そんだけボロボロになっただってわけか」

「……それだけじゃないわ」

しばしの沈黙の後、少女は続けた。

「 殺されたのよ」

「なに……?」

目を見開き、李兔の顔を見る鍵。

「殺されたの……私のたった一人の親友が」

李兔の声は、震えていた。

鍵は、真剣な表情で李兔を見据える。

「誰も信じられない様なこの戦いで、唯一信じられる人だったわ。でも昨日の夜、この地区の制圧者に襲われて……とてつもない力だったわ。二人掛かりでもまったく歯が立たなかった。そして、攻撃を受けて満身創痍になって倒れていた私の目の前で……アイツはあの子を……」

その声は、後悔の色に染まっていた。

「その後、アイツは私を殺そうとした。私は最後の力を振り絞って此処まで逃げてきたの」

「そして、たまたまこの病院にいた俺がアンタを助けた」

鍵の音が、空しく響く。

「私が弱いから……私が無力だったから、彼女を護れなかったのよ」
「……………」

鍵は地面に目を向け、黙り込む。

少女は少し潤んだ瞳を拭い、やがて笑みを浮かべて立ち上がった。

「ゴメンね、辛気臭い話しちゃって。私、もう行くわ。手当て、ありがとう」

「これから、どうするつもりだ？」

鍵の問いに、李兔はしばし答えなかった。

「……………さあ、どうするんだろ。私にも分からないな」

でも、と李兔は続ける。

「私は……私が後悔しない生き方をするわ。最後の時まで」

鍵が目を見開いて彼女の方を見た時、すでに李兔の姿は無かった。
おそらくギミックを行使したのだろう。

「……………」

間違いない。と、鍵は思う。彼女は戦うつもりなのだ。その制
圧者と。命をかけて。

あの怪我では勝ち目がほぼ無いに等しいという事も分かっていな
がら。

自分の誇りと、仲間のために。

「ざけんじゃねえよ……」

わなわなと身体を震わせながら、鍵は言う。

直後、彼は勢いよく立ち上がり、顔を上げた。

それは怒りや、悲しみが入り交ざった表情を浮かべていた。

「こんだけ関わっというて……放っておけるわけねえだろ！」

バン！！ と勢いよく扉を開け、鍵は駆ける。

行き先なんて分からない。彼女がどこにいるのかも分からない。

だが、彼は走った。

彼女を 李兔を死なせない為に。

STAGE 1 - 4 〓 9月30日・決戦(前) 〓

〓 9月30日 AM 11:45 都内某所 〓

「……お前、大丈夫なのか？」

「はい？」

突然の問いかけに、須藤は訝しげに目を細める。

「昨日からずっとそこに立ってるじゃねえか。疲れないか？」

おそらく親切からそう言ったのだろうが、剣斗が言うとうとうも怪しく感じてしまい、何か裏があるのではないかと考えてしまう。

須藤は剣斗をしばし見つめ、やがて視線をモニターへと逃がした。

「……別に」

「人が親切で言ってやってんのにつねえなあ……」

「アナタが人に親切でものを言うなんて珍しいですね、気持ち悪いです」

「お前さあ、そんなんじゃ一生結婚できねえぞ？」

「したくもありません」

剣斗はやれやれ、といった様のために息を吐く。再びモニターを見据える。

「にしても……天突はとんだお人好しだな……『あの人』にそっくりで」

天突。

その単語に、須藤は眉をひそめた。

剣斗は背もたれに体を預け、再び柿の種を口に放り込み、ポリポリ……と噛み砕く。

「アイツには、素質があるのかも知れねえな……『エグゼクティブ支配者』の素質が」

どこか物悲しそうにモニターを見据えて呟く剣斗に、須藤は顔色一つ変えず告げた。

「今日のアナタは、やはり気持ち悪いですよ」

〓 9月30日 PM 12:00 〓ギミック・タウン第

五区〓

「どこだ……どこにいるっ！」

鍵の音が、昼時のギミック・タウンに空しく響いた。息は上がり、傷の痛みは鍵の身体に鋭く突き刺さる。スクランブル交差点のど真ん中で、鍵は膝に手を付き、透明な液体を体中から放出しながら立ち止まった。

「早く……早く、見つけねえと……」

言い聞かせる様に鍵は呟く。だが、痛みと疲れに悲鳴を上げる身体は、思うように動いてはくれなかった。

「ちくしょう……傷なんてどうでもいいが……痛みがきつい……」

右わき腹から体中を駆けまわる激痛に、鍵の意識は朦朧としていた。鍵はおもむろに膝から手を離し、太陽の下を再び駆けようと足を踏み出す。だが、それさえも許さないと言う様に、痛みは鍵の意識を侵食していく。それでもなお、自身の意識に鞭をいれたその時。

「あの……」

か細い声が、朦朧とした鍵の意識の中に響く。

鍵は足を止め、声の聞こえてきた方向へ、ゆっくりと首を回した。もしそれが自分を狙ってきたギミックカーだったとしたなら、おそらく自分の人生はここで終わりだろう。その覚悟も出来ていた。

だが、天は彼を見捨ててはいなかった。

「大丈夫……？」

そこには、緩くカールが掛かった黒髪と赤い瞳を持ち、OL風の服を着た黒縁眼鏡の女性が立っていた。顔立ち自体は悪くないが、目の下には隈と思わしき黒い線が出来ており、「大人しい」というより「暗い」雰囲気をかもし出している。年はおそらく、鍵より上。大体二十代前後だろう。

「アン……タは？」

必死に声を搾り出し、鍵は問う。

「私……鈴原癒……アナタ……酷い怪我……」

必要な単語だけを並べていく癒とななる女性は、鍵の右わき腹を指差し、呟く様に言う。

白いカッターシャツはその部位だけが鮮血に染め上げられ、ポタポタ……と地面に赤い水滴を作っていく。

癒は鍵のすぐ隣まで歩み寄り、彼の右わき腹に両手をかざした。

「今……私……治療する……」

直後、彼女の掌がエメラルド色に発光する。

そして次の瞬間、鍵の目は大きく見開かれた。

あれほど自分を苦しめていた激痛が、みるみる内に引いていく。

それだけではない。右わき腹の傷が、彼女の光に触れた瞬間、ゆっくりと塞がれていった。

もう鍵の身体は痛みは無く、身体の疲れも楽になっている。

「驚いたな……アンタは《人を治療するギミック》なのか？」

だが、

「っ、おい！ 大丈夫か!？」

癒は突然顔を歪め、腹を抑えてうずくまった。

その抑えている部位を見て、鍵はハッとした様に目を見開いた。

「アンタまさか……」

「大……丈夫……」

癒は荒く息をしながら、よろよると立ち上がる。
鍵は咄嗟に手を伸ばし、彼女の身体を支えた。

「私……《治癒蘇生のギミック》……人の痛み……私に移す……」

「やっぱりそうか……大丈夫なのか？」

「平気……痛み……すぐ引く……もう……引いた……」

癒は額の汗を拭い、再び鍵と視線を交わした。

鍵はその様子を見て、安堵の笑みを浮かべる。

「ありがとう、アンタのおかげで助かった」

「お礼……いい……私……勝手にした……それだけ」

照れくさかったのか、癒は頬を赤らめ、視線を鍵からずらした。

鍵は、反応がかわいいなあ、などと考えたが、すぐに目を見開く。

「そうだ！　なあ、アンタに聞きたい事があるんだけど」

「……何？」

「あのおさ、この辺で、オレンジ色の髪と蒼い瞳を持った、黒いコー
トを羽織った高校生くらいの女の子を見なかったか？」

癒は、考え込む様に地面を見据えた。李兔と別れてから、ずいぶ
んと時間が経っている。事は一刻を争うのだ。ここで手掛かりを見
つけられなければ、もう李兔を探し当てる事は不可能に近い。

しばし静寂が空間を支配した後、癒は一言、呟いた。

「……知らない」

鍵は思わず、肩を落とす。

「そっか……ありがとな」
「でも……」

鍵は少し目を見開き、再び癒に向き直る。

「『あの子』なら……知ってるかもしれない」
「あの子？」

コクリ、と癒は首を縦に振る。

「私……一緒にいる……女の子……」
「どこにいるんだ？」
「……付いて来て」

癒は踵を返し、交差点の反対側を目指して歩いていく。
鍵は彼女の後ろ姿を見つめ、やがてゆっくりと、彼女の後を付いていった。

スクランブル交差点の角に立つビルの一室に、鍵は癒に連れられ、やって来た。

ガランとした店内を覗く窓ガラスには「テナント募集」の文字が

ある。

「今……戻った……」

扉を開き、癒は告げる。

すると奥から、それに答える声が響いた。

「早かったね、さっき言ってた『男の人』は無事助かったの？」
「大丈夫……問題ない……」

癒と『声』との会話を聞き、鍵は首をかしげた。

(この声……どっかで聞いた事あるような？)

そんな鍵の疑問は、すぐに解かれる事になる。

奥から出てきた少女は、鍵の記憶に強く焼きついた人物だった。

「っ、お前……！」

思わず叫び、鍵は目をこれ以上ないほどに見開く。

少女は不思議そうに首を傾げながら鍵に視線を向け、やがて輝か
んばかりに無邪気な笑顔を向けた。

「あつ！ 昨日の『能力模写のお兄さん』だあ〜！」

厚底ブーツを履いた銀髪藍眼の少女「如月来夏」は、さも嬉しそ
うに叫んだ。

「しかし驚いたな……まさかこんなにすぐにお前と再会するとは」
「ボクは嬉しいけどねえ」お兄さんとまた逢えて」

ギミック・ゲームに参加する限り、再び合間見えるであろう事は想定していた。だがまさか、こんなにすぐ、しかもこんな形で再会するとは思っていなかった様だ。鍵は、世の中は本当に分からないなあ、などと考える。

そして何より驚いたのは、あれほど自分を殺す事に固執していた来夏が、今は子猫の様に鍵に抱きついて来ている事だ。

「だってボク、お兄さんの事好きになっちゃったんだもん！」
「す、好きっつてお前……」

一体自分の何処を好きになっただろう。
鍵には理解不能だった。

(つくづく女ってわかんねえなあ……)
「って、そうじゃない！」

鍵は、自身の右腕に巻きつく様にしている来夏へと視線を向ける。

「なあ、お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんはいや！ 来夏だよ、如月来夏」

来夏は、わざとらしく頬を膨らませる。
調子狂うなあ、などと感じつつ、鍵は話を進めた。

「じゃあ、来夏。お前、オレンジ色の髪と蒼い瞳を持った、黒いコートを着た女の子を見なかったか？」
「うん……」

来夏は少し俯き、必死に記憶を辿っていく。
だがやがて、困った様に目を伏せ、首を横に振った。

「分かんない、見た事ない」
「そう、か……」

最後の希望が潰えてしまい、鍵は落胆の色を隠せなかった。
来夏は彼の顔を覗き込む。

「でも、その人がどうしたの？」
「死ぬ気なんだよ」

来夏と、その向かいに立っていた癒の目が見開かれる。

「この地区の制圧者って奴と戦おうとしてんだ。酷い怪我で、勝ち目薄いのも分かってんの……」

「制圧者……」
「それでお兄さん、その人を助けたいの？」

まっすぐにこちらを見つめる来夏と視線を交え、鍵は強く首肯する。

「ああ……一度関わっちゃったからな。それに、人が死ぬとこंना
ざ、俺は見たくない」

「そっか……じゃあ、ボクも協力するよ」

「え？」

鍵は間の抜けた声を上げ、ニコニコと笑いながらこちらを見つめる来夏を見た。

「言ったでしょ？ ボク、お兄さんの事好きになっちゃったって。

好きな人が救いたい人がいるんなら、それはもうボクの救いたい人
でもあるんだよ！」

「私も……手伝う……」

「癒さん……」

鍵は、視線を癒へと向ける。

「その人……怪我してる……私……癒せる……」

無論、それが癒自身に返ってくるという事も分かっている。

それでも彼女は、鍵が救おうとしている者を救いたいと願ったの
だ。

「誰かのために何かをしたい」

それが、癒の行動の原動力だったから。

鍵は二人の顔を交互に見やり、微笑んだ。

「ありがとう……来夏、癒さん」

二人は笑い、頷く。

「それにさ。ボク、制圧者についてなら、一つ良い事知ってるよ？」

「え？」

鍵は目を見開き、来夏に視線を向ける。
来夏は鍵から身体を離し、真剣な表情で彼を見た。

「この第五区の制圧者は……風霧清。かみさきり・きよめ 《風力支配者》ウインド・ロード って呼ばれてるギミツカーだよ」

「風霧清……そいつに、御包は挑もうとしてるのか？」

「多分ね。でも、その人大怪我してるんでしょう？ 風力支配者は恐ろしく強い上に、冷酷無比で有名だから……多分その人……」

ゾクツと、鍵の背筋に悪寒が走る。

早く見つけないと。

焦燥が、鍵の意識を支配しかけた。

「落ち着いて、お兄さん。大丈夫、その御包って人は、まだ風力支配者と戦ってない筈だから」

「……どういう事だ？」

「聞いた事ある……」

口を挟んだのは、癒だった。

「風力支配者……ある時間帯……ある場所にしか……現れない……」

「え？」

「理由は分からないけどね、あの人はある時間の、ある場所にしか現れないの」

鍵は、ゴクリと生唾を飲む。

「それで……その場所と時間帯は？」

9月30日 PM 1:00「都内某所」

「生きていたのですか……如月来夏は」

カタカタ、とキィを打つ音が響く一室で、須藤は呟いた。

剣斗はモニターを見つめ、キィを打ちながら一度デリートした来夏データを再発行していく。

「いや、アイツは確かにあの時、一度死んでいる」

「……どういう事です？」

カチリ、とエンターキィが押され、再び来夏のデータが現れた。

剣斗は作業を終え、須藤へと視線を向ける。

「助けたんだよ……あのおんな鈴原癒が。それがアイツの力だからな」

剣斗は目を細める須藤から視線を外し、再びモニターに目を向ける。

そこに映る鍵、来夏、そして癒を見つめ、見る者に不気味な印象を与える笑みを浮かべた。

「それにしても……天突は本当に、見れば見るほど『あの人』にそっくりだな」

須藤もまた、モニターに映る三人を見つめた。

「 9月30日 PM 6:00」ギミック・タウン第五
区」

太陽が空に隠れ、再び空を黒が支配しようとするギミック・タウンに、風力支配者『風霧清』は再び現れた。

年不相応の白髪と相反する漆黒の瞳を持つ彼は、決して筋肉質ではなく、むしろ華奢な体つきをしているが、見る者全てに恐怖を与える様な、野獣の様な雰囲気纏っていた。

退屈そうに遠くの空を見据える風霧は、不意に感じた人の気配に目を細める。

風霧はおもむろに気配を感じる方向へと視線を向けた。
そこに立っていたのは、

「おまエ……」

昨日、完膚なきまでに叩きのめした少女「御包李兔」だった。
今の今まで休んでいたため、体の痛みは若干治まり、疲れも取れている。

「馬鹿な女ダ……わざわざ殺される為に来たの力？」

「そうね……自分でも馬鹿だと思っわ」

どこか悲しそうに微笑み、李兔は言い放つ。

「でもお生憎様……私は親友を殺されて黙ってられるほど甘くないの」

李兔は風霧を睨み付け、叫ぶ。

直後、風霧は笑みを浮かべた。それは快樂殺人者のその様な、狂人的なものだった。

「安心し口……すぐに、お友達の所へお前を連れてってやる……」

直後だった。

ビュオ！！ と凄まじい音を立て、李兔の身体は吹き飛んだ。これも、風霧の風力支配によるものだ。彼女の頬や腕に傷が付く。

だが、李兔は冷静だった。この攻撃は、昨日も受けている。いわば、彼の常套手段だ。この攻撃を受ける事は、想定範囲内だった。

直後、李兔の足が青白く発光する。そして、吹き飛んだ先にあつたビルに足を付く。

「っ！」

風霧の目が若干見開かれる。

先ほど数メートル吹き飛ばした筈の李兔が、目の前まで迫っていたのだ。

これが、彼女のギミック『キック・アップ』キック・アップ 脚力上昇』である。

読んで字の如く、脚力を数十倍に上昇させる力だ。一見すれば地味な力だが、一回の蹴りが、生身の人間にとって一撃必殺の破壊力

を誇る。

「はああああ!!」

掛け声と共に、李兔の右足による鋭い蹴りが風霧を襲う。

風霧は風に身体を乗せ、紙一重でそれをかわした。

だが、李兔の攻撃は止まない。

すぐさま右足を地につけ、左足を振り上げる。

風霧は再び風に身体を乗せ、それをかわす。

直後、

「残念、それは見せ掛けよ!」
カムフラージュ

ニヤリと笑って、李兔は振り上げた左足で地面を蹴り、そのまま右足を風霧に向けた。

風に身体を預けた風霧は、着地の瞬間、無防備になってしまう。

李兔はそこを狙ったのだ。

一撃でも入れば、殺せなくとも倒す事は出来る。

だが

李兔の右足は、風霧によって呼び出された風のカーテンに防がれた。

李兔は目を見開く。

直後、風霧の右腕に大気が集中し、『風の鎧』を形成していく。

そしてそれは、風のカーテンに足を挟まれ身動きが取れない李兔の腹部を鋭く付いた。

李兔の身体は数メートル吹き飛び、地面に身体を叩きつけられる。

「カハッ
!」

空気が体から押し出され、衝撃に身体を曲げる。
そんな李兔に、風霧はゆっくりと近付いていく。

「残念だったナ……着地の瞬間を狙うのは良い作戦だったガ……」

風霧は狂った様に笑い、右腕を振り上げた。

そしてまた、そこに『風の鎧』をくみ上げていく。

「全ての風ハ……俺の支配下にある」

今の李兔にかわす手段も、防ぐ手段も　　ない。

（あーあ……ダメ……だった……か……）

李兔は自虐的な笑みを浮かべる。

腹部の痛みも、朦朧とする意識も、もうどうでも良くなっていた。

（ゴメン、ね……私……ダメだった……）

彼女の脳裏に浮かぶのは、自分の目の前で殺された親友の顔。

そして　　今日の朝に出会った、少年の顔。

（ゴメン、ね……天突……君……）

李兔の瞳から、一筋の涙が流れた。

運命に身を委ね、ゆっくりと目を閉じる。

直後、

凄まじい突風による爆音が

虚空を切り裂いた。

周囲のビルの窓ガラスが、音を立てて碎けていくのが分かる。地面を覆うコンクリートも、まるでおもちゃの様に剥がされて行った。

余波だけでこれだ。直接喰らって、生きていられる筈は無い。

だが 李兔は生きていた。意識がある。痛みを感じる。生きているという、何よりの証だ。

李兔は、ゆっくりと瞳を開ける。

そして目の前の光景に、涙で濡れた目を大きく見開いた。風霧の風の鎧は、止められていたのだ。

「雷の鎧」を纏った、能力模写の少年によって

「誰ダ？ おまエ……」

目を細め、忌々しげに問う風霧を、少年は睨み付けた。

「天突鍵。李兔^{コイツ}を……死なせない為に来た」

「死なせない為に来た、だト？ 貴様……俺を倒すつもり力？」

吐き捨てる様に、風霧は言う。

鍵を捉える瞳は、忌々しげにその色を濁らせていた。

「自惚れるナ……偽善者ガ！」

無意識に。風を纏う右腕に力がこもる。

一瞬押し潰されそうになるが、鍵は足に力を込め、左手を右腕に添えた。

彼の足元が、徐々に崩れていくのが分かる。

歯を食いしばり、鍵は必死にこらえた。

「天突……君……」

李兔は目を見開き、信じられないといった様子で鍵の背中を見据えている。

鍵は視線を彼女へと向ける事なく、告げた。

「言った筈だぜ？ 『他人に甘えるのも、一つの勇気だ』ってな」

ちらりと。

鍵は李兔に視線を向け、かすかに上唇を吊り上げた。

「アンタは親友の仇討つために、コイツにまた挑んだ……それは凄え勇気だと思う。」

だったら、今度はその勇気を、他人に甘える事に使ったらどうだ
?」

「でも……」

「嘘をつくな」

突然の言葉に、李兔はハッと顔を上げる。

鍵の顔に先ほどまでの笑みは無く、真剣そのものの表情を浮かべていた。

「自分に嘘を吐くな。お前の心が何て言ってるのか、何をしたいのか……今此処で曝け出せ」

李兔の瞳から透明な液体が零れ落ち、口内へと侵入していく。

しょっぱさが味覚を支配している李兔の中に浮かぶのは、たった四文字の言葉だった。

それは今までずっと言えなかった言葉。言いたくても、感情が邪魔をして吐き出せなかった言葉。

意を決した様に強く口を結んだ後、その言葉を 放った。

「たす……けて……」

李兔は、叫ぶ。

「助けて！ 私……まだ……死にたくない！」

鍵の上唇が、再び吊り上げられた。

「ああ……勿論だ」

刹那、

「さっきから何をごちゃごちゃ言っている!!」

風霧の力が強まり、鍵を襲う。

足元も、もう限界だ。

だが 鍵は笑みを浮かべ、風霧を見据える。

「悪いな……ちょっと相談事しててさ」

「何 つ!?」

刹那、風霧の目が見開かれる。

先ほどまで押し潰さんとしていた鍵の右腕が、風霧を押し返し始めた。

足元が不安定になったこの状況で、だ。

「テメエをどうやってぶっ潰すかってな!」

直後、鍵の右腕が振り切られ、風霧の身体を数メートル先へと押し戻す。

その時、風霧に隙が生まれた。一秒と掛らずに立て直せる様な、ほんのわずかな隙だった。

だが、鍵はそのわずかな隙が欲しかったのだ。

「来夏!」

直後。

ふわり、と。

李兔は妙な浮遊感に襲われた。

一瞬思考が止まった李兔だったが、すぐに自らの状況を把握する。自分よりも小柄な銀髪の少女によって、身体が抱え上げられたのだ。

「しっかり掴まってね、お姉ちゃん」

来夏はニコツと笑って、そのまま厚底ブーツで覆われた足に雷を纏う。

先の鍵との戦いで使用した『電光石火』だ。

彼女のブーツの底には、金属が埋め込まれている。それを媒体にする事で、彼女は電光石火を可能にしているのだ。

負傷した李兔をこの場から遠ざけようと、来夏は加速を始める。だが、それを制圧者が見過ごす筈が無かった。

「逃がす力！」

体勢を立て直した風霧は叫び、周囲の風を一点に集中させる。

直後、鋭き風の刃を形成したそれは、来夏の身体を貫かんと飛び出した。疾き事風の如し、という言葉からも分かる様に、風は高速で移動する。来夏と刃の距離は、徐々に縮まっていった。

刃が来夏の身体に穴を開けようとした、正にその時。風の刃は、『もう一つの力』と衝突し、そして消えていった。

風霧は忌々しげな調子で、その力の源を睨み付ける。

来夏と風霧の中心に位置し、風霧の風を相殺したギミックカー、天突鍵を。

「お前の相手は……俺だ」

「何処までも邪魔をする力、偽善者」

「生憎だが、俺の偽善は性分これでね。もう直らんと思っぜ」

でもな、と鍵は続け、キッと風霧を睨んだ。

「偽善だろつと何だろつと……俺は俺の心が望む事をする」

スツ　と鍵は右手を上げ、風霧へと突きつける。

「俺の心が、さっきから五月蠅え位に叫んでんだよ……」お前を倒せ』ってな」

「やってみる偽善者……その心ごと、俺がこの手で切り刻んでやる！」

鍵と風霧の戦いが始まらんとする場所から少し離れた路地裏に来夏は飛び込んだ。

壁に寄り掛からせる様にして李兔を下ろした後、路地裏の奥の人影に視線を移す。

「癒、お願い」

「ん……」

人影の正体は、来夏と行動を共にしている女性、鈴原癒だった。癒はいつもの蚊の鳴くような声で短く答え、李兔を見つめる。

風の鎧に貫かれた腹部からは血が滴り、全身から汗が染み出ている。苦しそうに息を荒くするその様子は、風霧の力の大きさをこれでもかと示している。

「酷い怪我……私……今……治療する……」

癒は李兔の腹部に、エメラルド色に発光する両手を添えた。すると李兔の傷は見る見る内に塞がれていき、顔色も良くなっていく。

無論、それに伴い、癒の表情は曇っていった。

激痛と苦痛が、一緒になって癒を襲う。

だが、彼女はそんな痛みも苦しみを振り払う様に、治療を続けていった。

李兔の傷が完全に戻った時、癒はパタリ、と地に倒れる。

「っ、大丈夫!？」

身体が元に戻った李兔は、焦る様子で癒の横に座り込む。

癒は苦しげに息を吐きながらも、赤い瞳を李兔へと向けた。

「問題……ない……それより……行って……」

癒の言葉に、李兔は一瞬目を見開いた。

「それって……」

「決まってるじゃん」

答えたのは、来夏だった。

「お兄ちゃんから話は聞いたよ。親友の仇を討ちたいんでしょう？
だったら此処で諦めちゃダメだよ」

それに、と来夏は繋げる。

「お姉ちゃんを救いたい、お姉ちゃんを助けたいって思ってる人が……お姉ちゃんの味方が、此処に三人もいるんだよ？ だから大丈夫！ 絶対に大丈夫だよ！」

包み込む様な来夏的笑顔に、李兔の涙腺は再び緩む。

だが、寸での所でそれを拭い、李兔は引き締まった表情で来夏を見つめた。

「そうだよね……天突君も、頑張ってくれてるもんね……此処で私が諦めちゃったら、ダメだよね」

強い口調で、李兔は言う。

自分自身に、言い聞かせる様に。

来夏は答えに満足した様に、ニコツと笑った。

「それでね？ お兄ちゃんから一つ、伝言を預かってるんだ」
「え？」

来夏は笑みを浮かべたまま、その伝言を李兔に告げた。

ビュオ！！ と、突風が吹き荒れる。

だがそれは、街を包みこむ様に吹いていた先ほどまでのそれとは違うものだった。

研ぎ澄まされた刃の様なその風は、ある一点目掛け、それを切り刻まんとするかのように吹いていた。

その標的となっている少年、鍵は、雷の矢を放ち、それを防ぐ。仮にかわしたとしても、風を自由自在に操れる風霧は、再び刃のベクトルを自分へと向けてくるだろう。

だから彼は、雷の矢を放つ事で相殺した。

だが、それでは防ぐ事は出来ても勝つ事は出来ない。

それは、鍵自身もよく分かっていた。

鍵は目を細めて態勢を低くすると、風霧へと向かって駆け出す。風霧は上唇を吊り上げ、右掌を鍵へと翳した。

「死ネ！」

手から放たれるのは、鋭く速い風の刃。

大気が螺旋を描く様に、鍵に吸い込まれる様に飛んでいった。だが、

「死んでたまるか！」

鍵は頬に傷を作りながらも、その刃をかわしたのだ。
風霧は、面食らった様に見開く。

鍵は右掌に雷を集中させ、大きな一つの塊を作り出した。

そして、その一撃を風霧へとぶつけようと、右手を振りかざす。

だが
その右手は、一つの螺旋状の風に止められる事となつた。

鍵は目を見開き、自身と風霧とを断絶する様な風を見据えた。

それは、目に見える程の密度で集中された風のカーテンだった。

いや、風ではない。

それは、全てを飲み込もうとする様な『竜巻』だった。

直後、圧力が鍵の身体を襲い、そのまま彼を竜巻の中へと飲み込んだ。
んだ。

鍵の身体は竜巻の手によって弄ばれ、そのまま上空へと吹き飛ばされていく。

直後、鍵は地面へと強く叩きつけられた。

鍵の身体は、糸が切られたマリオネットの様に、だらんと地面に倒れる。

刹那。

ビュ!!! という鋭い音が、小さく響いた。

同時に自身の右頬を襲うかすかな痛みに、風霧は少し目を見開く。
そのまま無造作に右手を頬へと添えると、ねと、とした感触が神経を弱く刺激した。

それは、自身の身体から流れた紅い液体。

吹き飛ばされる寸前、鍵が決死で放った一撃だった。

「驚いたナ……あの態勢から一撃を放つてくるとハ。だが……」

風霧は手に付いた自らの血を舐めとりながら、猟奇的な笑みを浮かべた。

「もう、お前の身体は限界の様だがナ……」

風霧は、少し先にいる鍵へと視線を向けた。

地面には不恰好な丸く紅いカーペットが敷かれ、鍵の身体は、その上にぐったりと、うつ伏せに倒れている。

「結局、貴様の力はこの程度ダ……いくら偽善を働こうガ、貴様は英雄ヒーローになる事なんて出来ないんだヨ」

風霧は、嘲り笑う様に吐き捨てた。

だが直後、彼の表情は凍りつく。

それは驚きや感心より、恐怖の色が強く見受けられた。

「何故ダ……何故、まだ立ってこられル？」

ゆらりゆらりと身体を揺らしながら立ち上がる鍵に、風霧は若干ひるんだ。

「悪いナ……こう見えても、俺は諦めが悪いんだ」

どこか自嘲的な雰囲気を纏わせた鍵の言葉が、静寂の中に妙に響いた。

「それに俺は、お前の言う様に主人公には向いてない見てえだな」
でも、と鍵は続け、血が滴る口を三日月形に歪める。

「こつやって、時間を稼ぐくらいなら出来る」

「何？」

風霧が訝しげに目を細めた、その時だった。

「おっと、動かない方がよいよ。風力支配者さん」

無邪気な少女の声が、漆黒の街に響いた。

発信源は、風霧の背後。

彼に対して両手を突き付けている来夏だった。

その両方には、小石の様なものが握られている。

先ほど路地裏で拾ったものだ。

風霧は視線のみを来夏へ向け、目を細める。

それとは対照的に、来夏は年不相応な妖艶さを兼ね備えた微笑を
浮かべていた。

「ねえ、超電磁砲レールガンって知ってる？ 物体を高速で打ち出す装置なん
だけど……」

「それを二方向から同時に喰らっちゃまうとしたら……どつする？」

来夏の正反対に立つ鍵が、つぶやく様に言う。

風霧がそちらに目を向ければ、彼はふらふらと立ち上がりつつ、右手に持っている、先ほどの竜巻で粉碎された道路の破片を風霧へと突き付けていた。

「お前の力……風力支配の正体は、もう分かってんだ」

風霧をきつく睨み、鍵は言う。

「お前のその力は、周囲に吹く風の流れを読み、それを操るもんだ。一見強力だが……そいつには重大な欠点がある」

「何だト？」

訝しそつに吐き捨てる風霧に、鍵は笑みを浮かべる。

「それは、風を一方向にしか操れないという事。もし風向きを西に向けて吹かせれば、同時に周囲の風も西へと吹いちまう」

つまり、と鍵は続ける。

そして、告げる。

「お前は二方向から同時に繰り出された攻撃には、風のカーテンを読み出す事は出来ないって事だ」

バチバチと、二人の手から弾ける様な音が漏れた。二つの小石は、既に発射準備が整っている。

超電磁砲。

これが、風力支配者を倒すための切り札だった。

「いくぜ、制圧者……俺達の雷に、焼かれる！」

凄まじい爆音と共に、二人の手から小石が放たれた。
否、それはもう小石ではない。

それは確かに、風すらも打ち抜いてしまう様な鋭い弾丸だった。

二つの弾丸は、一つの標的目掛けて一直線に放たれる。

自分達の倒すべき相手、制圧者を打ち抜かんと、飛んでいく。
だが、

「それで俺を倒したつもりか？」

不敵な声が、響く。

「確かに俺の風は、一方ひかたにのみしか操れない。だがな、お前達は一つ大きな勘違いをしている」

同時に、風霧は右手を軽く振った。

「俺のこの風は、回転させる事も出来る」

刹那。

突風が吹き荒れた。

いや……吹き荒れる、という表現は、この状況には合わないかもしれない。

その風は、風霧を囲む様に吹いていた。

それは、まるで彼に抗う者全てを拒絶するかの様な、分厚い壁となる。

鋭い弾丸と化した小石が、分厚い壁となって立ちはだかったその風と激突する。

ギリギリと火花が散り、二つの力が同時に、その壁を貫かんと奮闘していた。

鍵と来夏は、この攻撃に全ての力をかけている。

もし防がれてしまえば、この先、二人に勝機はほぼ無いに等しい。鋭い視線で、二人は風と激突する力を見据える。

だが

シュー、と弱々しい音を立て、小石は竜巻に飲まれて碎け散った。

風霧は、笑う。

猟奇的に、全てを飲み込まんとする様な表情で、笑う。

「ハハハハア！ どうダ！ これが格の差ダ！ 所詮、貴様らの様な弱者が集まった所で、俺には勝てないんだヨ！」

風霧の声が、街中に響いた。

己の勝利を確信し、絶望に打ちひしがれているであろう二人をあざけるように。

だが……それはすぐに、絶句へと変わる事となった。

鍵と来夏は、上唇を吊り上げていた。
まるで釣糸に獲物がかかったかの様に。

「言ったはずだ」

鍵の声が、風霧の耳を打つ。

「俺は主人公には向いてないってな。俺達が攻撃すれば、お前が風で自らを包み込んで守るだろうって事は分かった。それこそが…俺達の狙いだ」

「どついう…事ダ？」

目を細め、風霧は問う。

「まだ気付かない？」

次に彼の耳を打つのは、来夏の声だった。
彼を嘲り笑うような笑みを浮かべ、告げる。

「風をアナタの周りに発生させてアナタ自身を守る事で、アナタには一つ、隙が生まれる。あとはその隙から攻撃を加えれば良い」

「隙……だト？」

「？上？だよ」

鍵の声が、木霊する。

「『台風の目』って知ってるか？ 台風は周囲へのダメージは大きい、その中心は完全なる無風状態だ。つまり、その中心目掛け、上空から一撃をくわえればいい」

「……フンツ！ 何を言い出すかと思えば……」

風に自らを守らせたまま、風霧は鼻で笑った。

「上から攻撃を加えるだト？ この風は10m以上もある……上からの攻撃を加える事が出来る者など……」

「いるんだよ、一人」

さえぎる様に、来夏は言う。

「アナタを倒すため、上まで飛び跳ねて攻撃出来る様な、とんでも無い脚力を持った人が一人、ね」

その時、風霧は目を見開く。彼にも、心当たりがあったのだ。

自分が知る中で一人、とんでもない脚力を操る少女がいた事を。

「そいつこそが……この戦いの主人公ヒーローになれる奴だよ」

直後、ゴン！！ という鈍い音が、風の中から響いた。

かと思えば、あれほどまでに吹き荒れていた風が、見る見る内に消えていく。

その中心にいるのは、その操り手である風霧 では無かった。

風霧に唯一、止めを刺す攻撃を繰り出す事の出来た少女『御包李兔』が、そこにはいた。

その足元に、風霧は仰向けに倒れている。

立ち上がる気配は無い。気を失って倒れているだけだろうが。来夏はニツコリと笑い、鍵は微笑みを浮かべ、李兔を見据えた。路地裏で戦いを傍観していた癒も、鍵の元へと歩み寄る。咄嗟に鍵を治療しようと手を添えたが、鍵はそれを遮った。これ以上痛みを受けては、彼女の精神が持たない、という判断からの行動だ。

癒は渋々といった様子で手を下ろし、李兔を見つめる。

鍵もまた、こちらを優しく見つめる李兔を見つめた。

「……終わったのか？」

鍵の問いに、李兔は満面の笑みを浮かべ、告げた。

「うん……終わったよ」

東より顔を出し始めた太陽が、ビルの隙間から四人を照らした。

STAGE 1 - 6 Ⅱ 遊戯終了へゲーム・セット Ⅱ

「よう、鍵。おはよ！」

「おお」

「おはよ、天突君！」

「ああ、おはよ」

激動の三日間、彼にとつての非日常への入口であつたギミック・ゲームが終了して、早4日。大分怪我も回復し、実は一週間ぶりの登校を果たした鍵を待っていたのは、そんな日常だつた。マンションを出て、約五分。一体何人の生徒に「おはよう」と声を掛けられただろうか。彼らはいつも通りの笑顔で、鍵に挨拶をしてくれた。そう、いつも通り。何も変わらずに。

(この三日間、俺が死亡遊戯デスゲームに参加してたなんて……誰も思わねえよな)

そして自分自身が、ギミックと呼ばれる得体の知れない力をその身に宿しているという事も。

仮に今から一週間前に戻り、当時の自分自身に『お前はギミックに一つて言う一種の超能力で、これから三日間殺し合いに参加する事になるから』と告げたとしても、当時の自分は信じないだろう。そしてもし鍵がギミック・ゲームというモノの存在を知らなかったとしたら、友人が死亡遊戯に参加していたなどと想像する事もまた、無いに等しい。

がやがやと話し声を発しながら過ぎていく人波の中を、鍵は黙々と歩いていく。

思い起こすのは、4日前。

ギミック・ゲームが終了した直後の事だ。

「天突様、お迎えに上がりました」

風霧を倒した直後、鍵達の前に最初に現れた女性、須藤絢は、いつも通り顔に表情を貼り付ける事なく告げる。

「あの女の人、誰？」

「……俺の扇動者だ」

来夏の問いに、鍵は須藤より目を離すこと無く答える。

「はじめまして、御包様、鈴原様、如月様……私は天突様の専属扇動者を務めさせて頂いております、須藤絢と申します」

淡々と告げ、須藤は三人に向かい深く頭を下げる。

「迎えに来た、って言ったよな？」

「はい」

須藤は頭を上げ、鍵の問いに答える。

そして、鍵にとって今一番の救いの言葉を、何の感情も乗せる事なく、告げた。

「たった今、今回のギミック・ゲームは終了致しました」

李兎達と別れた鍵と須藤は、そのまま黒いリムジンに乗り込み、鍵の自宅マンションへと向かった。

須藤によれば、もうじき李兎達の扇動者もギミック・タウンに到着するという。須藤は扇動者の中でも、行動するのがかなり速い様だ。

「初めに、ギミック・ゲームよりの帰還、おめでとございます」

本当にこの女は、めでたく思っているのだろうか。

何の感情もない須藤の言葉に、鍵は一瞬疑問に感じた。

「後何度、こんな事があるんだ？」

今、鍵が最も気になっていたのは、この事だった。

彼は三日間の死亡遊戯に半ば強引に参加させられ、強敵と戦い、重症を負いつつも、初めての仲間と共に、この三日間を生き残ってきた。

だが、たった一度きりの帰還で開放してくれるほど、ギミック・ゲーム死亡遊戯は甘くはない。

李兎は『去年から参加している』と言っていたし、須藤も『ギミック・ゲームは100年前から続けられてきた』といていた。

「そうですね……申し訳ありませんが、私にもそれは分かりません」

申し訳なさが全く伝わらない声色で、須藤は言う。

「あと数回かも知れませんが、あと何十年かも知れません……もし

かすると、アナタが死ぬまで続けなければならない可能性もありま
す」

「そうかよ……」

思わず、鍵の声は暗いものとなる。一年に何度この戦いがあり、
それが何年続くのかすらも分からない。まるで出口の見えない、永
遠の暗闇が続くトンネルの中に閉じ込められた様な気分だった。

そんな様子を、須藤は黙って見据えていた。

直後。キイツと高い音を立て、リムジンがその動きを止めた。

「……着きましたよ」

須藤に言われ、鍵は窓の外を見つめる。そこには、確かに見慣れ
たマンションが聳え立っている。

「では、また次のギミック・ゲームの際に及び致します」

須藤の言葉には答えず、鍵はリムジンから出る。

彼を出迎える一般的な風貌をしたマンションが、何故か教会の様
な雰囲気を感じている様に、鍵には感じられた。

鍵の顔から、思わず微笑みが零れる。

そして、実に三日ぶりとなる自室へと足を向かわせようとした時、

「扇動者^{わたし}は今まで多くのギミックカーに専属してきましたが……」

不意に、須藤の声が鍵を呼び止める。

いや、呼び止めたわけではない。もしかしたら、独り言だったか
も知れない。

だが、鍵は足を止めた。そして、須藤の乗る黒いリムジンへと視
線を向ける。

須藤はその整った顔を鍵へと向け、告げる。

「アナタの様に『仲間と共に生き残る』という手段を取った方は、
いませんでした」

鍵の目が、見開かれる。

「……………」

「皆さん自分が生き残る事で必死でして……………アナタの様に、仲間を
作るという思考が無かったのだと思います」

「……………何が言いたい？」

「つまり……………アナタは、今まで私が出会ってきたどのギミックカーと
も違うタイプの人間です。なので……………今までのギミックカーの方々と
は違った事が出来るかも知れません……………」と、私は思います。では、
失礼します」

須藤は軽く会釈をすると扉は閉まり、リムジンはそのまま街中へ
と消えていく。

その後ろ姿を、鍵はぼんやりとした視線で見つめていた。

(よく分からんが……………アイツなりに、俺を気遣ってくれたのか?)

直後、鍵は淡く微笑みを浮かべた。

「何というか……世渡り下手そうな奴だよな、須藤って」

誰に言うでもなく、鍵はつぶやいた。

彼女が言った言葉の意味は、今もよく分からない。

だが何にしる、今は戦うしかないのだ。

真実に辿りつく為にも。

この戦いを終わらせる為にも。

そして、自分が生きる為にも。

「……あ」

直後、鍵の目の前に、彼の通う高校の校門が現れた。

どうやら、彼は家を出てから約十分もの間、自分の世界に浸っていたらしい。

「こんなに集中した事、今までに無かったかも……」

苦笑しつつ、鍵は校内へと足を踏み出　　せなかった。

誰かに呼び止められたとか、後ろ服を掴まれたというわけではない。

彼の足が、自ら入るのを拒絶したのだ。

鍵は目を見開き、そして、悟る。

(そう、か……)

次に鍵の顔に、自虐的な笑みが浮かんだ。

(俺は 怖いんだな)

導き出された答えは、あまりにも簡単なものだ。鍵は一週間前、非日常的な殺し合いの世界に足を踏み入れた。そして三日間、戦い、出会い、そして生き残った。今、目の前に広がっている日常が、それを証明している。

だが、鍵は既に非日常にどっぷり浸かった人間だ。

(そんな俺を……日常は受け入れてくれるのか?)

結局、彼は彼がいった通り、怖いのだ。

日常が、自分を拒絶する事が。

(まったく……やっとココに戻ってこれた………どんだけ小心者なんだよ俺は)

鍵は右手で前髪を押さえつけた。

自分で自分が馬鹿らしくなって来る。

(結局……『ギミツカー』には元から似合わなかったのかもな)

鍵は思う。

それが、ギミツカーの宿命なのかも知れない、と。

その時、

「あら、天突君じゃない。一週間も学校休んで何やってたの?」

彼の後ろから、声。

とても穏やかで、とても聞きなれた、とても懐かしい、声。
鍵はゆっくりと後ろを向き、その声を見つめる。

「……委員長……」

「何よ、久しぶりに会ったって言うのにその反応は」

惜しげもなく伸ばされた艶のある黒髪と、同色の瞳を持つ赤瀏眼鏡の少女、やりが・あんこ鑑画館子が、怪訝そうに鍵を見つめて言う。

「それより、何をそんな所で突っ立ってるのよ」

「え？ ああ……」

返答に困り、鍵は視線を泳がせる。

まさか『学校に入るのが怖い』なんて言えるわけも無い。
そんな彼の様子を見かねた館子は、

「うあ！？」

「ほら！ さっさと入るわよ！」

グイッと。

力強く鍵の手をとり、彼を学校へと引きずり入れた。

鍵は、おそらく今自分ほとんどでもなく間抜けな顔をしているのでは無いか、と思う。

あれほど自分自身を拒絶せんとしていた日常の中に、この少女はいとも簡単に迎え入れてくれた。

握られた手はとても小さく、とても乱雑だったけれど……とても、温かった。

自然と、鍵は笑みを作る。

「……大した人だよ、全く」

「？ 何か言ったかしら」

餡子は足を止め、しかめっ面で鍵を見据えた。
鍵は一瞬面食らったように目を少し見開いたが、やがて微笑む。

「別に……ただ、そんなに握り心地がいいのかなあと思ってさ？」
「は なっ！？」

途端に、餡子は熱湯に飛び込んだかの如く頬を赤く染め、鍵の手から自身のそれを引き抜いた。

「べ、べべべべべべ別にそんなじゃないわよ！！ ただ、アナタが校門の前でウジウジしてるから、サボるんじゃないかと不安に あ、ふ、不安にって言うのは、委員長としてって意味で……その……うう……」

手をバタバタと振りながら弁解したかと思えば、今度は下を向いてしまった。ころころと変わる餡子の態度を、鍵は楽しそうに見つめている。

ただ。嬉しかったのだ。
自分を受け入れてくれた、日常あんなの存在が。

「ちょ、ちよつと！ 何ニヤニヤしてんのよ」
「ん？ 別に……」

鍵は言い、その顔を餡子へと近づける。
数センチ前にまで迫った鍵の顔に、餡子は更に顔を真っ赤に染めて、後ずさる。

「な、何よ……」

一日の始まりを告げる鐘が、東京の街に高らかに響いた

。

STAGE 2 - 1 「縁は異なもの、味なものの、残酷なもの」

十一月下旬。快晴。

しかしこの頃になると、例え太陽が昇っていても、寒さは本格的に感覚神経を刺激する様になっている。すると人は温もりを求め、マフラーやコートなどの防寒具を着用するようになった。

都内某中学校に通う銀髪藍眼の中学生、如月来夏（おちづか）もまた、例外ではない。

中学の制服の上から茶色いコートと、紺色のマフラーを着用し、両足は年中厚底ブーツで覆われている。夏であっても、彼女が厚底ブーツを履かない事は無い。

それは、ブーツの中に、針金を通してあるからだ。

この特殊なブーツが、彼女にとって必要不可欠なものなのである。

理由は、一つ。

自らの力を、最大限に引き出すためだ。

彼女は、普通の人間ではない。ギミックという得体の知れない力をその身に宿した、ギミックカーと呼ばれる存在だ。

内容は単純明快、『雷を操る事』である。

なので、ブーツに針金を仕込む事で、彼女の雷の力を最大限に発揮出来る様になっているのだ。

『ギミック・ゲーム』と言われる、史上最悪の死亡遊戯（デス・ゲーム）を生き抜くために。

尤も、この少女が何度も死線をくぐり抜けているなど、誰も想像しないだろうが。

「はあ………何で日曜日に来て学校に行かなきゃなんないんだよお…

…」

うんざり、と言った調子に、来夏は言う。

そう、本日は花の日曜日。

学生にとつては、教師という怪物モンスターや、親からの「勉強しなさい！」などと言つ口撃くつげきから逃れる事の出来る、日常生活にとって唯一無二の憩いの24時間である。

友達と買い物に行く者、家でのんびりと過ごす者、はたまた恋人と共に過ごす者（俗にリア充とも言つ）など、その過ごし方は学生の数だけあると言つても過言ではない。

そして、その中でも最も『学生が過ごしたくない休日』を、今の来夏は過ごそうとしてしているのだ。

そう 『補習』である。

普通、夏休みなどの長期休日に行くべきものだが、彼女の場合、それでも追いつかない程にやらかしているのだ。

宿題未提出は当たり前、テストは国語以外赤点、更には授業中の居眠り常習犯 e t c ……。

生徒指導課の教師から目をつけられている存在なのである。

つまる所、彼女は『馬鹿』なのだ。

もしくは『阿呆』だろうか。

「うう〜、寒い……」

はあ、と両手に息を吹きかけながら、来夏は呟く。

途端に、彼女はハツとした様に目を見開き、次に満面の笑みを浮かべた。

「そうだ、今度お兄ちゃんにマフラーを編んであげよう！ お兄ちゃんも、この寒さに参まってるだろうし」

来夏はニコニコと笑いながら、頬を赤らめて街に行く。

すれ違う人々からすれば、気持ち悪い事この上ない。

ちなみに、彼女は一人っ子である。

お兄ちゃん、と言うのは、本当の兄では無く、先に述べた『ギミツク・ゲーム』で出会ったある少年の事だ。

彼女に大きな影響を与えたその少年は、今の彼女にとって『最も大切な人』の部類に入る。

つまるところ、来夏は俗に言う『恋する乙女』なのだ。想い人のため、マフラーを編んであげようと言うその健気さには、全く涙が出そうになってくる。

ただ彼女の場合、そんな事より勉強しろ、と言いたくもなるのだが。

どの色の毛糸が良いか、などとすっかりマフラーに思考を持っていかれた来夏の耳に、

「ほら、出来上がりだよ」

「わあ！ すげえ！」

男の優しく低い声と子供の無邪気な高い声が、届いた。

来夏はその声にハッと我に返り、何事かと声の方向に視線を向ける。

そこは、公園だった。

「ねえねえ！ 次もつと凄いの作って」

「そうだねえ……よし、じゃあ次は影分身を作ってあげよう」

その一角に、三人ほどの子供がベンチを囲む様に立っている。その中心には、一人の中年男性が、ベンチに座り、何やら忙しく手を動かしていた。

右手には鋏を持っており、左手には折り紙を持っている。そして折り紙を折っていき、こなれた手付きでそれを不規則に切っていく。

するとたちまち、折り紙の中からある形が現れた。

「ほら、影分身の出来上がりだよ」

「うわぁ、凄いなぁ！」

見事な手付きで折り紙から影分身の形をした人を切り出した男性に、子供達は笑顔になっていく。

来夏は、その光景をただ呆然と見つめていた。

目は大きく見開かれ、心なしか体が震えている様に見受けられる。思い出されるのは、つい一ヶ月ほど前の出来事。冷たい地面の感触、自らに振り下ろされる刃、そして　　自らを襲った恐怖と、絶望。

その時、ハッと来夏は我に返る。

「っ……早く行」

来夏は誰に言うでも無く呟くと、足早にそこを後にした。

その表情には、先ほどまでの笑顔は微塵も見受けられず、何かから逃げる様な焦燥だけが、映し出されていた。

こちらは、休日のある高校の教室。

顔を覆うほどのプリントの束が、のっしのっしと廊下を闊歩していた。傍から見れば、どれだけ異様な光景である事だろうか。プリントの束には足があり、男子生徒用のズボンを着用している。

その前を歩くのは、その半分にも満たないほどのプリントを運ぶ女子生徒だった。

名は、やりが・あんど鑑画餡子。この高校の二年三組の生徒にして委員長を務めている、文字通り『優等生』である。

餡子は胸ほどまでに抱えたプリントを運ぶ足を一旦止め、と盛大にため息を吐き、数歩後ろを歩いているプリントに向き直った。

「何してるのよ。早く運ばないと、帰れないわよ？」

「……………ちよつと待て委員長」

不意に、プリントの右隅から、少年の顔が覗いた。少し癖のある黒髪を持ち、顔立ちは割かし端正な方ではないだろうか。一ヶ月前とは違い、現在は学ランを、第一ボタンを外す形で着用している。

彼の名は、あまつぎ・きい天突鍵。こんなだが、一応この物語の主人公である。そして先に述べた来夏の想い人でもあったりもする。

そして彼もまた、来夏と同じく『ギミツカー』の一人として、死線をくぐり抜けた過去がある。尤も彼の場合、まだ一度しか経験は無いのだが。

いつも眠く退屈そうな黒い瞳は、今は怒りに若干細められていた。

「休日にいきなり呼び出されたかと思えば、この仕打ちは何だ。俺は『少し手伝って欲しい事がある』としか聞いてねえぞ」

「だから現に少し手伝ってもらってるじゃない。私もちゃんと運んでるし」

「明らかに少してレベルじゃねえだろコレ！ さつきから俺とアンの運ぶプリントの量の差がハンパねえんだよ！」

事の顛末はこうだ。

本日11月26日（日）、休日に限って早く起きてしまう鍵は、する事も無いので怠惰に身を任せ、布団に寝そべっていると、突然餡子から『少し手伝って欲しい事があるから、すぐに学校に来て、いいわね』と電話。ラプ・コール答える間も無く電話は切られ、断ると後が怖い

と考えた鍵は、すぐさま学校に向かう。

どうせすぐ終わるだろう、などと安易な考えを抱いていた彼は、全く救いようの無い阿呆だった……。

そして現在、鍵は餡子の奴隷が如く大量のプリント類やら段ボール箱やらを運ばされているのだ。

元々は委員長である餡子が頼まれた事だったが、さすがにコシだけの数を女の子一人に運ばせるのは無理があった。そこで、鍵に頼んで来てもらったのだ。

「良いじゃない、別に。どうせアナタ、暇だったんでしょ？」
「うっ……」

そう言われては、鍵に返す言葉など無い。

確かに彼女の言うとおり、鍵は暇だった。

もし彼女に呼び出されていないければ、一日を意味無く過ごす事になっただろう。

「くっそ……後で何か奢ってくれよな、こんだけ手伝ってやってんだから」

「あら、ご褒美を求めているの？ まるで犬ね」

「ひでえ言い様だなオイ！」

結局、鍵は彼女には敵わないのだ。

昔から、そうであった様に。

鍵は諦めたようにため息を吐いた。

「はぁ……つつかよお、何で俺だけだったんだ？」

他にも暇そうなヤツぐらいいるだろうが。こう言うのは二人より三人、三人より四人の方が早く終わると思うんだが」

「うっ、そ、それは……」

餡子は、言葉に詰まった。

プリントに視線を落とすと、その頬がたちまち紅色に染まっていた。まさか、『鍵と二人でいたかった』などと言える筈も無い。彼女もまた来夏と同じ『恋する乙女』なのだ。

だが、『THE 鈍感』の鍵にそんな事に気付く筈も無く。

「？ 何赤くなってるんだよ……熱でもあるのか？」

「うえっ！？ な、何でも無いわよ！ ほら！ さっさと歩く！」

「あっ、おい！」

鍵の呼びかけも空しく、餡子は足早に廊下を歩いていった。

「何なんだあ？ おい……最近の委員長、なあんか可笑しいよなあ」

首をかしげる鍵は、既に見えなくなった餡子の後を、ゆっくりと追っていく。もしかして本当に熱があるのか？ などと呑気に考えながら。

全く鈍感というのは罪なものだ……。

そして此処にもまた、休日を学校で過ごす少女がいた。オレンジ色の髪と蒼い瞳を持ち、制服の上から黒いコートを羽織っている少女の名は、『御包李兔』。

彼女もまた、鍵や来夏と同類の人間だ。一年前から、ギミック・ゲームに参加し、死と隣り合わせの三日間を繰り返している。

「ええっと……職員室は、っと」

呟き、李兔はきよろきよろと辺りを見回しながら、慎重に進んでいく。入学して早七ヶ月ほど経つが、未だに構造がうる覚えなのは彼女くらいだろう。いわゆる『方向音痴』というやつだ。と言つても、彼女の場合そこまで深刻では無いが。

そして、職員室へと向かう廊下の角を曲がるうとした、その時。

ドンツッ！ と衝動が李兔を襲った。

「いたっ！」

「きゃっ！」

同時に、バサバサバサア！！ と紙が舞い散る音が聞こえてくる。

「う、ごめんなさい！」

衝撃に尻餅を付いていた李兔は、慌てた様子で盛大に地面に散らかった紙を拾っていく。

「ああ、いえ。こちらこそ、ゴメンなさい」

ぶつかった相手は申し訳なさそうに言い、同じく紙を拾っていった。見れば、どうやらプリントの様だ。差し詰め、教師に頼まれて休日に登校して来たのだろう。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

プリントを拾い終えた李兔は、相手に拾ったプリントを渡そうと顔を上げる。

相手は少女だった。おそらく自分より年上だろうか。赤淵眼鏡を掛けており、清楚な雰囲気が見て取れる。

(可愛らしい人だなあ……)

李兔が思わずポーっと見つめていると、

「あの……何か？」

「あつ、いえ！ すみません」

首を傾げる少女に、李兔は慌てた様子で両手を振り、苦笑いを浮かべる。

その時、

「何やってんだ？ 委員長」

少女の後ろから、声が聞こえて来た。

声色からして、おそらく男性であろうその声に、李兔は若干眉を顰め、

(？ この声、どこかで……？)

李兔は顔を上げ、声の主を確認する。

そしてその顔を見て、彼女は目を見開いた。

「あれ？ お前……」

そこにいたのは、彼女の記憶に焼きついていた少年だった。

彼女を精神的・肉体的にも救ってくれ、李兔の人生に大きな影響を与えたその人は、李兔の顔を見て声を上げた。ぶつかつた少女は、二人の顔を交互に見やり、不思議そうに首をかしげた。そして、

「……………御包？」

プリントの束を抱えた少年、天突鍵の声が、静寂が支配する廊下に響いた。

「しかし……………まさかお前がうちの高校の一年だったとはな」

学校からの帰り道。

各々やるべき事を終え、三人は共に帰路に付いていた。

「本当に偶然よね……………前逢った時は夏服だったから分からなかったけど」

学ランの夏服など、どこの学校もさして変わらない。

しかも前回がお互い必死だった事もあり、制服などを気にする時間など無かつたのだ。そして鍵もまた、彼女の制服が血に染まっていた事、黒いコートを羽織っていた事もあり、彼女が自分と同じ学校の制服だと気付く事が出来なかつた。

「あの、二人はいつから知り合いなの？」

完全に蚊帳の外になりかけていた餡子が、言う。先ほど軽い自己紹介は済ませたものの、やはり鍵と仲の良い女の子は気になるようだ。

「こういう少女ほど、ヤンデレになってしまう可能性が高いのだが……そうならない事を、切に願うばかりだ。」

「ああ、えつと……ちょっと、街でな」

咄嗟に思いついた言い訳を、鍵は苦笑しつつ告げる。李兔もまた、苦笑を浮かべて餡子を見た。

「少し煮え切らないものの、餡子はそれ以上言及はしなかった。」

「それで、天突君と餡子さんはどんな関係なんですか？」

話題転換のための李兔の問いだったが、餡子にとっては右フックを喰らった様な衝撃となった。たちまちその顔は真っ赤に染まっていき、思わず俯いてしまう。

李兔が不思議そうに首を傾げると、

「ああ、俺と委員長は……」

鍵の声に、餡子の体がビクッと反応する。一体鍵が、どのように返すのか、気になって仕方が無かったのだ。

鍵は少し間を置き、やがてこう答えた。

「強いて言うなら、俺は委員長の奴隷……ゴフッ！？」

鍵の腹に、衝撃が走る。

原因は、餡子の右手……いや、正確に言えば、彼女の右拳が原因だ。鍵が李兎の問いに答えた瞬間、世界チャンプも驚きの、見事なまでの腹パンチを決め込んだのである。

餡子はうずくまる鍵を尻目に、あからさまな怒りのオーラを発し、帰って行ってしまった。

「え、ええと……」

李兎は困ったようにオロオロと手を泳がせ、二人を交互に見やる。

「く、くそ……最近の委員長は、やっぱり可哀しいぞ」

腹を抑えて立ち上がりつつ、鍵は声を震わせる。

「何というか……お気の毒ね」

それは鍵に対するものか、それとも餡子に対するものか。その時、

p p p……

二人の携帯から発せられる甲高い機械音が、重なった。

まるで「せーの」と息を合わせたかの様に。

直後、二人の背筋を悪寒が襲う。

目を見開き、同時に互いの携帯を取り出す。

静寂の中開いた二つのディスプレイに映し出された言葉は、同じものだった。

「ギミック・ゲームのお知らせ……」

鍵の音が、静寂を破る。

それは、今の彼等にとって、もっとも受け取りたくない内容のメ
ール。

『ギミック・ゲームの開戦を告げるもの』だった

。

STAGE 2 - 2 「妖狐と死神」

都内某所にその身を置く廃ビル。まだ日が真南に昇っている様な真昼間であるにも関わらず、その場所は陰湿で恐怖感を煽る雰囲気漂わせていた。普通の人間ならば、本能的にこの場所を避けてしまっただろう。

だが今、そんな幽霊ビルに足を踏み入れんとしている男性が一人いた。首元まで伸び、酷い寝癖が付いた髪と、鋭く切れた漆黒の瞳を携え、まるで人を騙す妖狐の様な雰囲気醸し出している。

彼の名は、ならはし・けんた檜橋剣斗。日本の首都「東京」の四分の一を使用した死亡遊戯、「ギミック・ゲーム」の監視者を勤める者である。

デス・ゲームゲーム監視用カメラの映像が映し出される複数のモニターが不気味に構える5階の一室を仕事場とし、おそらく他の誰よりもこのビルの構造を熟知しているであろう。

本来ならば、彼はこのまま5階のモニタールームへと赴くのだが……今日は違った。

廃ビルに入った後、普通なら階段を上る所を、今日は降りてしまっている。一階から階段を降りた場所にある空間、つまりは「地下」へと。

このビルは、過去はとある事務局のオフィスなどに使われていた場所で、本来「地下」などと言う空間は無かった。ディスクワークが主体という事もあり、作るのが無かったのだ。だが、現にこうして地下たる空間は在る。

早い話が、作ったのだ。

ある組織が、ある実験のために。

折り曲がった階段を下り終えた時、暗く淀んだ空気が剣斗の体を舐める。何度も此処に足を運んでいる剣斗だったが、この空気には

どうも慣れない。

不快感に眉をひそめ、剣斗は薄暗い廊下を、コツン……コツン……と、音を立てて歩いていく。

苔むした、約50mほどの長い石造廊下の両端には、禍々しい雰囲気を放つ鉄の牢獄が、薄気味悪く連なっていた。これは「過去に牢獄として使われていた物を残してある」という様な代物ではない。今、この時代に、現在進行形で使われているモノだ。

牢獄の中には、「人らしき者達」が、その尖りきった眼光を剣斗に向けている。身体は長時間地下に閉じ籠っていた為に穢れきっており、瞳以外からは生気が微塵も感じられない。一ヶ月近く何も口にしていない餓死寸前のライオンの様な瞳だ。いつ剣斗に襲い掛かっても全く不思議ではない。

だが、剣斗はそんな無数の敵意を気にすることなく、牢獄群を歩いていく。その鋭い黒眼を鈍らせる事なく。

しばらく行くと、そんな地下世界とは不相応な鉄の扉が、剣斗の前に立ちふさがった。

「禁断の扉」さながらの雰囲気を醸し出す扉の存在感に臆する事なく、剣斗は取っ手に手をかける。

しばしの静止の後、剣斗は取っ手を握る右手に力を込め、重くヒンヤリとした扉を押し開けた。

刹那、彼の視界を「光」が覆う。

陰湿な鉄の扉の先にあったのは、まるで「宇宙航空研究開発機構」の様な、静寂とパソコンが支配する、少年野球場ほどの広さを誇る空間だった。初めて入った者は、どこでもドアでも使ったのでは？と錯覚しても可笑しくない。

「あ、檣橋の旦那じゃないですかあゝ。お久しぶりですうゝ」

静かな室内に、ほわわんとした雰囲気を纏った声が木霊する。同時に、剣斗の前に一人の少女が、スキップをする様に近寄ってきた。

明るい朱色の髪は、少し巻かれて腰辺りまで伸びている。小さく可愛らしく整った顔の中には、大きく丸い小金色が二つ、キラキラと光っていた。頭には虎と思わしき獣耳のカチューシャを付け、黒いショートパンツとこげ茶色のブーツを着用。上半身は胸元に大きな赤いリボンの付いたパフスリーブで覆われ、両手首に桃色のシユシユを装着していた。年は10代前半だろうか。外見は年相応のものに見える。

ただ一箇所を覗いては。

それは、女子ならば誰もが気にするであろう、へその上辺りにある二つの膨らみ。そう、「胸」だ。

この年の少女は、まだ貧相であっても不思議ではない。いや、それが普通だろう。

だが彼女は、とにかくデカイ。メロンでも詰めているのでは無いかと思われるほど、デカイ。一体何を食べたら此処まで集中的な成長を見せるのだろうか。しかも彼女の着用するパフスリーブは薄手で、華奢な体つきに反するそれには対応し切れておらず、美しい谷間が露になっている。可愛らしいロリ顔に規格外の巨乳、しかも薄着の上着と言つ、健全男子ならば卒倒してしまう様な少女に、剣斗は微笑んでみせる。

「よう、真紀菜^{まきな}。久しぶりだな」

「お久しぶりですう」。ずうくと旦那に逢いたかつたんですよ。？」

真紀菜、と呼ばれた少女は、天使の如き満面の笑みを剣斗へ向けた。

少女の名は、世道真紀菜^{せどうまきな}。全国の幼女愛好家の皆様には申し訳ないが、こう見えてもれっきとした社会人であり、まもなく23歳の誕生日を迎える。

「ところで……アイツは？」

心なしか、声を低くして剣斗は言う。

それは、これから宿敵との戦いをが待っているかのような表情だった。

真紀菜は若干首を傾げ、上目遣いに剣斗を見据える。

「アイツって……ああ局長ですかあ？　いつもどおり、あそこでただらしてますよあ」

そういつて真紀菜が指差した先には、確かに一人の青年が、文字通り「ただら」していた。

年は、剣斗とそう変わらない様に見える。身体は痩せ細っており、生気が欠片も感じられない。薄茶に染まった髪はボサボサに乱れてしまっている。

ヨレヨレの白衣に身を包んだ彼は、右足を椅子の体育座りの要領で上に乗せ、左足は右足と90度になる様に胡坐を搔いている。白く細い悪魔の様な両手にはコーヒークップを携え、その水面を覗き込む様に俯いている。どこことなく剣斗と似た身体的特徴、雰囲気を持ちながらも、彼とは異なつた雰囲気を受ける青年だった。

剣斗は嫌悪に眼を細め、青年の前へずんと歩み寄っていく。そして青年の前で足を止めると、ようやく彼も剣斗の存在に気付いたのか、顔を上げた。

見る者全てに負の印象を抱かせる様な瞳だ、と剣斗は思う。無感情な灰色の瞳の下には濃い隈が出来ており、まるで「死神」の様である。

青年は剣斗の顔をしばし食い入るように見つめ、やがてニタア、という効果音が付きそうな不気味な笑みを浮かべた。

「これはこれは……懐かしい顔を見てしまったりしましたね」

妙な口調のその青年から紡がれる言葉は、その一つ一つが何かの呪文の様に不気味だった。

青年の名は、たちばな つかり立花創造。

東京の地下に悠々と広がるこの空間にて、ある実験の総責任者を務める青年である。

「相変わらず薄気味悪い奴だな、創造」

剣斗は嫌悪感を隠す事無く言う。

だが創造は、その不気味かつ余裕な笑みを絶やさない。それどころか一層その笑みを深めたのだ。

「アナタも相変わらず無愛想な方だったりしますね。ともかく、ようこそギミックメーカーキングラボ実験室へ」

剣斗は小さく舌打つ。

「歓迎は不要だ。能力者を創り出そうなんて気味悪い実験に興味は無いんでな」

「あらら、だったらどうして実験室じしに来ちゃったりしたんです？」

少し残念そうな雰囲気を纏う無表情で、創造はわざとらしく首をかしげた。

「お前に聞きたい事がある……今日からのギミック・ゲーム、また奴等を放つと聞いた」

「それが？」

剣斗は顔を一層顰め、机に両手を付いて、前のめりになって創造

の顔を睨む。

「奴等を連続して放つ事は禁止されている筈だ。局長たるお前が、それを知らんとは言わせんぞ」

「ええ、もちろん知っちゃったりしてますよ」

一向に表情を変えない創造。

真紀菜が、それを遠巻きに見つめていた。

「お言葉ですが、実は今回の彼等の投入は、本部つえからの命だったりしちゃうんですよ」

「……何？」

苦虫を潰したように、剣斗は顔を顰める。

対照的に、創造は邪神の如き笑みを浮かべた。

とても邪悪に、醜悪に、そして愉しそうに。

「私としては、一石二鳥だったりしちゃうんですけどね。実験データも取れますし……」

一泊おき、創造は告げる。

紛う事なき、彼の「本心」を。

「うまくいけば、あの天突鍵を葬るチャンスも生まれるわけだった
りしちゃういますから」

静寂が、実験室を支配する。

断片的に聞こえるコンピュータの音も、もう聞こえない。

剣斗、創造は互いに対照的な表情で対峙し、真紀菜は何の表情も無くそれを見つめていた。

この静寂から支配権を奪ったのは、剣斗だった。机から手を離し、見下す様に創造を見つめる。

「近々思い知る事になるぜ、お前」

剣斗の声が、室内に澄み渡った。

憎悪でも嫌悪でもない、ただただ澄み切った声だ。

「天突鍵を葬る事が どれだけ困難な事か」

創造は、答えない。

剣斗もまた、次の言葉を紡ぐ事はない。

そのまま創造に背を向け、出口へと戻っていく。

途中、少し心配そうな表情で「大丈夫？」と真紀菜が声を掛けてくれ、剣斗はそれに対し、「問題ない」と優しく微笑み、頭を撫でた。

「アナタが彼の何を買っているのかは知りませんが……私
は私の生み出した作品ものに絶対的自信があります」

一人事の様に、創造が言葉を紡ぐ。

対して剣斗が歩みを止める事は、ない。

ガゴン、と音を立て、既に鉄の扉を開いていた。

「天突鍵もまた、私にとって貴重な実験材料いけにえであり、同時に

『憎悪を向けるべき相手』でしかありませんよ」

創造の言葉は、剣斗の耳に届いたのか。

彼が薄暗い地下牢へと消えた今、それを確かめる術は無い。

創造はフツ、と淡く微笑み、こちらを見つめる真紀菜に向かって、告げた。

「さあ、世道さん。仕事に戻りますよ」

けたたましい音を立てながら、剣斗は地下牢を抜けていく。

来る時は両端から向けられていた無数の殺意も、彼の並々ならぬ秀気には霞んでいた。創造の元へ行く事自体、剣斗は好きではない。いや、むしろ嫌っている。

あの人を小ばかにしたような態度もそうだが、あの不気味な灰色の瞳が、苦手だった。

自分の心の奥底までも、見透かされてしまいそうな気がして。

一步一步進む度に、不快感が剣斗の心を刺激していく。

「くそっ！」

思わず、剣斗は近くにあった牢獄を殴りつけた。

ガンツ！ と金属音が、薄暗い廊下に空しく響く。

直後、

「……また、アイツと逢って来たのか」

ノイズが掛かった様な男性の声が、牢獄から剣斗の耳へと這い寄

って来た。

剣斗は若干睨む様に、その牢獄の主を見やる。

他の獄者同様、ボロボロの穢れた服を着た男だった。本来は金であつたであろう髪は、今は土で茶色がかつている。暗い牢獄を刺す様に光る紅の瞳は、しっかりと剣斗を捉えている。

剣斗が殴りつけた牢獄の主、かみずり・たくま神刷琢磨だ。

「おいおい心外だな……自分から人ひとん家を殴り付けておいて、何だその眼は？」

「……何か様か」

琢磨の問いに答える事なく、剣斗は吐き捨てる。

「つくづく無愛想な男だ……それより、アイツには何を言っても無駄だぞ」

「アイツ」というのが誰の事なのかは、剣斗にはすぐ分かった。

「アイツのアレは、他人がどうこう出来るものじゃない。いや、もう本人にも改善の手立てが無いかもな」

「そうだろうな。尤も、俺はアイツを改心させるつもりなんて更々無いし、アイツがこの先どうなるうと知った事ではないが……時に神刷」

「何だ？」

「お前、前回のギミック・ゲームで殺した相手の事を覚えているか？」

剣斗の問いに、琢磨は思わず声を上げて笑った。

彼の問いが面白かった、という訳では無い。

やがて笑いが収まると、琢磨はその鋭い紅を再び剣斗へと向ける。

「殺した奴の名など……いちいち覚えてられるか」
「……………そうか」

剣斗は何の感情も乗せる事無く呟き、再び地下牢を抜けんと歩みを進める。

「おい」

地上へと繋がる階段に一步足を踏み入れた剣斗は、その声に一度、足を止める。

「その俺が殺したって奴の名……一応聞いとしても良いか？」

剣斗は振り返る事なく、琢磨が求めた名を、淡々と告げた。
そして、カツン、カツンと音を立てながら、地上へと消えていく。
琢磨は冷たい石の壁に背を預け、天井を仰ぐ。
その雪の様に白い顔に、不気味な笑みを浮かべて。

「フ……フフフ……アッハハハハハ！！」

琢磨は右手を眼に当て、牢獄中に響き渡る程の大声を上げた。
狂気と邪悪に満ちた、常人ならば有り得ない様な声だった。

「面白い……俺から逃げ延びた奴がいたなんてな」

琢磨は右ポケットに手をつ込み、ある物を取り出した。

「如月来夏、か……良い退屈凌ぎになりそうだ」

右ポケットより取り出した飴玉を口の中で転がしながら、琢磨は一人、呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2659x/>

Gimmick Game

2011年12月2日01時49分発行